

『朱子語類』卷一四～一八訳注（二〇）

岩本真利絵・宇佐美文理・小陳佑真・中純夫・福谷彬

『朱子語類』卷一八「大学」五（1～33条）

〔校勘〕

○「舉遺書或問」朝鮮古写本は「舉遺書云或問」に作る。

○「而可以有覺一段曰」成化本は「段」を「段」に作る。朝鮮古写

本は「而可以有覺也伊川曰」に作る。

○「自有箇」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○則其效著矣 朝鮮古写本は「效」を「効」に作る。

或問下

傳五章

獨其所謂格物致知者一段

〔校勘〕

○成化本は「段」を「段」に作る。

1条

先生為道夫讀格物說、舉遺書或問學何為而可以有覺一段、曰。能致其知、則思自然明、至於久而後有覺、是積累之多、自有箇覺悟時節。勉強學問、所以致其知也。聞見博而智益明、則其效著矣。學而無覺、則亦何以學為也哉、此程子曉人至切處。 道夫

〔訳〕

先生は、私（楊道夫）のために（程頤の）格物説を読んで、『河南程氏遺書』の「或るひと學は何為ぞなすれ以て覺有るべきかを問ふ（あるものが「學問してどうすれば目覚めることができるのでしょうか」と尋ねた）」という一段を挙げて仰った。「『河南程氏遺書』に「能く其の知を致せば、則ち思ひ自然と明らかにして、久しくして後に覺有るに至る（その知を推し致すことができれば、思慮は自然と明らかとなり、しばらくすると目覚めることができる。）」というのは、工夫が蓄積していつて、自然とこの目覚めの段階になった、ということだ。「勉強學問」とは、それによってその「知」を致す方法であり、「聞見博

くして智は益すます明らか」というのは、その効験が表れたものだ。学問して目覚めることがなければ、どうして学問したと言えるだろうか。これこそ程子が人に教える際に至つてこの上なく身に切実なところだ。楊道夫録

〔注〕

(1)「擧遺書或問學何為而可以有覺一段」「遺書」は『河南程氏遺書』を指し、『語類』のこの条の内容全体が朱子による程氏の説の解説である。「或問學何為而可以有覺一段」とは、以下を踏まえる。『河南程氏遺書』卷一八「遺書伊川先生語第四」問。學何以有至覺悟處。曰。莫先致知。能致知、則思一日愈明一日、久而後有覺也。學而無覺、則何益矣、又奚學爲。思曰睿、睿作聖。纔思便睿、以至作聖。亦是一箇思。故曰。勉強學問、則聞見博而智益明。」また、『大學或問』ではこの『河南程氏遺書』の説を踏まえつつ以下のよう言う。「曰。或問於程子曰。學何爲而可以有覺也。程子曰。學莫先於致知。能致其知、則思日益明、至於久而後有覺爾。書所謂思曰睿、睿作聖、董子所謂勉強學問、則聞見博而智益明、正謂此也。學而無覺、則亦何以學爲也哉。」

(2)「時節」現代語の「時候」に同じで「時」が二音節化したもの。

三浦國雄『朱子語類』抄 一五五頁を参照。

(3)「勉強學問：聞見博而智益明」注(1)で引用の『河南程氏遺書』の語を踏まえ、更に『漢書』「董仲舒傳」の賢良対策の語に遡る。『漢書』卷二六「董仲舒傳」「彊勉強問、則聞見博而知益明。彊勉強道、

則德日起、而大有功。此皆可使還至、而立有效者也。」

(4)「是積累之多、自有箇覺悟時節」「積累」は「積み重ね」。『語類』では以下のように、「工夫」の語と共に用いられることが多い。『語類』卷一五、一〇〇条、記録者名欠(130)「然學者未能得會恁地、須且致其知、工夫積累、方會知至。」なお、本条で説かれる、学問を積み重ねて「覺」に至るといふ程子の説は、以下の朱子の「格物致知」説に発展する。『大學章句』傳五章「至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」

2条

問。致知下面更有節次。程子説知處、只就知上説、如何。曰。既知則自然行得、不待勉強。却是知字上重。可學

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一八は本条を収録しない。

〔訳〕

質問。「致知」の後には更に段階があります。程子が「知」について説いたところは、ただ「知」に即して説いている、ということでしょうか。先生「知ってしまえば自然と実行できるのであり、意識して努力することを必要としないのだ。つまりは「知」の字の部分が重点

なのだ。」鄭可学録

〔注〕

(1) 「問。致知下面更有節次。」「下面」は「次に」の意。「節次」は「段階」の意。ここでは、格物致知以下の大学の八条目を指す。『語類』卷一五、二二条、潘履孫録(1305)「格物、致知、誠意、正心、雖是有許多節次、然其進之遲速、則又隨人資質敏鈍。」

(2) 「曰。既知則自然行得、不待勉強。却是知字上重。」「勉強」は意識して努力すること。『中庸章句』二〇章「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之之一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也。」なお、本条では朱子は「格物致知」で言えば自然と以降の条目も実行できると言うが、別のところでは「格物致知」が出来ていても、「誠意」の段階で慎重にしなければならぬといふ説いていることは以下を参照。『大學章句』傳六章注「經曰。欲誠其意、先致其知。又曰。知至而后意誠。蓋心體之明有所未盡、則其所發必有不能實用其力、而苟焉以自欺者。然或已明而不謹乎此、則其所明又非己有、而無以為進德之基。」

3条

伊川云。知非一概、其為淺深有甚相絶者云云。曰。此語說得極分明。至論知之淺深、則從前未有人說到此。 道夫

〔校勘〕

○「其為淺深有甚相絶者云云」朝鮮古写本、「云云」は小字に作る。
○「曰此語說得極分明」朝鮮古写本は「曰」の上に「先生」の二字がある。

○「從前未有人說到此」朝鮮古写本ではこの後に以下の文面が続く。「而程子發之。且虎能傷人、人共知。而懼之有見於色者、以其知之深於衆人也。學者之於道、能如此人之於虎、真有以知之、則自有不容己者矣。」とある(句読点は引用者による)。

〔訳〕

程伊川は「知」はすべて同じというわけではない。知ることが浅いものと深いものとで、隔絶して離れているものがある」云々と言っています。先生「この言葉は非常に明晰に説いている。知の浅深を論ずることについては、伊川以前は誰もこのことを説き及んではない。」楊道夫録

〔注〕

(1)「伊川云。知非一概、其為淺深有甚相絶者云云。」「一概」は「同じ」の意。このままの発言は未詳。朝鮮古写本が本条の後半に繋げて言うように、虎に襲われた者を例に程子が「真知」と「常知」の違いを説いたのは本条と同じ趣旨の発言と考えられる。『河南程氏遺書』卷二上「真知與常知異。常見一田夫、曾被虎傷。有人說虎傷人、衆莫不驚、獨田夫色動異於衆。若虎能傷人、雖三尺童子莫不知之。然

未嘗眞知。眞知須如田夫乃是。故人知不善而猶爲不善、是亦未嘗眞知。若眞知、決不爲矣。」「河南程氏遺書」卷一八「知有多少般數、煞有深淺。向親見一人、曾爲虎所傷、因言及虎、神色便變。傍有數人、見佗說虎、非不知虎之猛可畏、然不如佗說了有畏懼之色、蓋眞知虎者也。學者深知、亦如此。」また、朱熹も以下のように『大学或問』で引用する。『大学或問』程子曰：昔嘗見有談虎傷人者。衆莫不聞、而其間一人神色獨變。問其所以、乃嘗傷於虎者也。夫虎能傷人、人孰不知。然聞之有懼有不懼者、知之有眞有不眞也。學者之知道、必如此人之知虎、然後爲至耳。若曰知不善之不可爲而猶或爲之、則亦未嘗眞知而已矣。」

4条

知、便要知得極。致知、是推致到極處、窮究徹底、真見得決定如此。程子說虎傷人之譬、甚好。如這一箇物、四陲四角皆知得盡、前頭更無去處、外面更無去處、方始是格到那物極處。 淳

〔校勘〕

○「真見得決定如此」朝鮮古写本は「定」字を欠く。

○「如這一箇物」朝鮮古写本は「這如一箇物」に作る。

〔訳〕

「知」とは、知り尽くそうとすることだ。「致知」とは極限のところ

まで推し致し、窮め尽くして徹底して、必ずこのようであればならぬということだ。程子が「眞知」ということについて、虎が人を傷付けたことの比喩を説いたのは、大変よい。この一個の物について言えば、四辺と四頂点（隅々まで）全てを知り尽くして、前方にはこれ以上進むところが無く、外側にもこれ以上進むところが無い、というようにして、それでこそその物の極限のところまで知り尽くしたということなのだ。 陳淳録

〔注〕

(1) 「致知、是推致到極處」『大学章句』の朱注や『語類』に同様の表現が見える。『大学章句』経、朱注「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」同上「知至者、吾心之所知無不盡也。」「語類」卷一五、九四条、沈僩録「所以貴致知、窮到極處謂之致。」

(2) 「窮究徹底」『語類』に同様の表現が見える。『語類』卷一〇、一六条、李杞録（I 163）「讀書須是窮究道理徹底。如人之食、嚼得爛、方可嚥下、然後有補。」

(3) 「真見得決定如此」「決定」は「必ず」の意。『語類』卷一四、一四四条、葉賀孫録（I 256）「且如事君、若不見得決定著致其身、則在内親近、必不能推忠竭誠、有犯無隱。」

(4) 「程子說虎傷人之譬」前条の注（1）を参照。程子が「眞知」を説明する際に、虎に襲われた体験を持つ者が、虎の名を聞いただけで真に恐怖した、という例を用いたことを指す。

(5) 「四陲四角皆知得盡」「四陲四角」は四角形の四辺と四頂点、こ

こでは「隅々まで」の意。『語類』卷六二、八四条、沈憫録(IV 1500)「戒懼無箇起頭處、只是普遍都用。如卓子有四角頭、一齊用著工夫、更無空缺處。若說是起頭、又遣了尾頭。說是尾頭、又遣了起頭。若說屬中間、又遣了兩頭。」

(6) 「前頭更無去處、外面更無去處」「前頭」は、前。「更無去處」は、それ以上、行くところがない。余すところ無く極め尽くしていることをいう。『語類』卷一五、九七条、記録名欠(1501)「致其知者、自裏面看出、推到無窮盡處、自外面看入來、推到無去處、方始得了。」

5条

人各有箇知識、須是推致而極其至。不然、半上落下、終不濟事。須是真知。

問。固有人明得此理、而涵養未到、却為私意所奪。

曰。只為明得不盡。若明得盡、私意自然留不得。若半青半黃、未能透徹、便是尚有渣滓、非所謂真知也。

問。須是涵養到心體無不盡處、方善。不然知之雖至、行之終恐不盡也。

曰。只為知不至。今人行到五分、便是它只知得五分、見識只識到那地位。譬諸穿箭、稍是箇人、便不肯做、蓋真知穿箭之不善也。虎傷事亦然。 德明

〔校勘〕

○「便是尚有渣滓」成化本は「渣」を「查」に作る。

〔訳〕

「人には各々この知識があつて、推し致してその究極のところまで極めなくてはならない。そうでなくては、中途半歩で、結局ものにならない。是非とも「真に知る」ことが大切だ。」

質問。「確かに人がこの理を明らかにできていても、心を養い育てること(「涵養」)ができていなければ、私意によつてその「知」が奪われてしまう、ということでしょうか。」

先生「ただ、明らかにし尽くしていかないためだ。もし、明らかにし尽くしていれば、私意は自然と留まることはできなくなる。もし、半分未熟で半分熟しているという様子で、透徹できていなければ、まだ渣滓かすがあるということ、所謂「真知」ではないのだ。」

質問。「心の本体にまで涵養して尽くさないところが無いようにして、それでこそよく、そうでなければ、これを知ることが至り尽くしていても、そのことを実践すると結局完全ではなくなってしまうだろう、ということでしょうか。」

先生「ただ、知が至っていないためだ。今、人が半分まで進んだとすれば、彼はただ半分だけ知ることができた、ということであり、見識はその程度までということだ。これを泥棒のことに例えるなら、いやしくも人である限り、泥棒しようとしなないのは、泥棒することが不善であることを「真に知」っているからだろう。虎が人を傷つけるこ

ともまた同様だ。」廖徳明録

〔注〕

(1) 「半上落下、終不濟事」「半上落下」は「中途半端」の意、『語類』卷一六、一七九条 (I 353)、潘履孫録に既出。また「不濟事」は口語で「役に立たない」、「ものにならない」の意。興膳宏等編『朱子語類』訳注 卷十々十一、二五頁を参照。なお、留守友信『語録譯義』はこの箇所に対して「半バ路ヲノボリ行ソレヨリ落ルコト、事ヲシトゲヌコト」と言う。

(2) 「私意自然留不得」「留不得」は、留まることができない。「不得」は、動詞の後について不可能の意を表す。

(3) 「半青半黄、未能透徹」「半青半黄」は、作物が熟したもの(黄)と未熟なもの(青)とが半ばすることを意味し、ここでは、「中途半端」な様を意味する。『語類』卷九、四二条、楊道夫録 (I 154)「今既要理會、也須理會取透。莫要半青半黄、下梢都不濟事。」

(4) 「便是尚有渣滓」「渣滓」は「かす」。『語類』卷一七、二三条、曾祖道録 (II 375)「假如大鑪鑪鐵、其好者在一處、其渣滓又在在一處」

(5) 「須是涵養到心體無不盡處、方善」「須是…方」は「…してそれでこそ…だ」「心體」は「心の本体」の意。『語類』卷三五「論語十七 泰伯篇 曾子曰士不可以不弘毅章」八四條、葉賀孫録 (III 26)「恭甫問。弘是心之體。毅是心之力。曰。心體是多大。大而天地之理、纔要思量、便都在這裏。」

(6) 「見識只識到那地位」「地位」は「境地」、「段階」。卷四、七六條、

一二八條などに既出。

(7) 「譬諸穿窬、稍是箇人、便不肯做、蓋真知穿窬之不善也。」「穿窬」は、盗むこと。言葉としては以下が早い。『論語』「陽貨」「子曰。色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。」集注「穿、穿壁。窬、踰牆。言其無實盜名、而常畏人知也。」また、内容としては以下に基づく。『孟子』「盡心」下「孟子曰。人皆有所不忍、達之於其所忍、仁也。人皆有所不為、達之於其所為、義也。人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。人能充無穿窬之心、而義不可勝用也。」朱注「充、滿也。穿、穿穴。踰、踰牆、皆為盜之事也。能推所不忍、以達於所忍、則能滿其無欲害人之心、而無不仁矣。能推其所不為、以達於所為、則能滿其無穿窬之心、而無不義矣。…明必推無穿窬之心、以達於此而悉去之、然後為能充其無穿窬之心也。」また、「稍是箇人」は、いやしくも人である限り。「稍是」は、「いやしくも」「仮にも」の意。

(8) 「虎傷事亦然」程子の「真知」の比喩を指す。本卷三条注(1)、四條を参照。

6 条

致知、是推極吾之知識無不切至、切字亦未精、只是一箇盡字底道理。見得盡、方是真實。

如言喫酒解醉、喫飯解飽、毒藥解殺人。須是喫酒、方見得解醉人。喫飯、方見得解飽人。不曾喫底、見人說道是解醉解飽、他也道是解醉解飽、只是見得不親切。見得親切時、須是如伊川所謂曾經虎傷者一般。卓

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一八は本条を収録しない。

○「他也道是解醉解飽」朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。

〔訳〕

「致知とは自分の知識を推し極めて、極限まで切実でないところがないようにする」は「切」の字でもまだ精密でなく、「盡」字の意味に他ならない。知り尽くして、はじめて真実なのだ。

ちように、酒を飲めば酔っ払えるし、飯を食べれば満腹になれるし、毒薬は人を殺すことができるのと同じだ。実際に酒を飲んでこそ、酒が人を酔わせることがわかるし、実際に飯を食ってこそ、飯が人の腹を満たせることがわかるのだ。一度も飲食しないで、人が「これが酔うこと、満腹になるということだ」と言うのを見て、彼も「これが酔うこと、満腹になるということだ」と言えば、それは切実に理解したことはない。切実に理解した時であれば、きつと程伊川が言うところの、かつて虎に襲われた者と同じようになるはずだ。

黄卓録

〔注〕

(1)「致知、是推極吾之知識無不切至」 現行の『大学章句』の経文の「致知」に対する朱子の注には「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」とあり、「切」の字を用いずに「盡」の字を用いている。ただし、朱子が「格物・致知」の解釈に「切」の字

を用いていた時期が存在していたと考えられるのは、例えば、『語類』卷一五、八八条、周謨録「致知者、須是知得盡、尤要親切。尋常只將知至之至作盡字說、近來看得合作切至之至。知之者切、然後貫通得誠意底意思。如程先生所謂真知者是也」、『語類』卷一六、五九条、陳淳録(II 335)に「周問大學補亡、心之分別取舍無不切。」とあることからもうかがわれる。『大学章句』での朱子の解釈の変遷については、吉原文昭『南宋学研究』「大学章句研究」六六三頁以降を参照。

(2)「只是見得不親切」「親切」は「身に切実」の意。『語類』卷九「論知行」、七六条、沈憫録(I 138)「今之學者不曾親切見得、而臆度揣摩為說、皆助長之病也。道理只平看、意思自見、不須先立說。」(3)「如言喫酒解醉」「喫酒」は酒を飲むこと。学問が身につくことを説明する際に朱子は好んで飲酒して酔いがまわることで例える。『語類』卷一四、一七三条、李儒用録(I 88)「問知止至能得。曰。如人飲酒、終日只是喫酒。但酒力到時、一杯深如一杯。」「解」は「…できる」の意。

(4)「毒藥解殺人」 毒薬に人を殺すほどの効用があることを知るところを言う。このことが「喫酒」「喫飯」のように、必ずしも体験を求めていないことは以下によってわかる。『語類』卷四六、一三条、葉賀孫録(III 123)「人知烏喙之殺人不可食、斷然不食、是真知之也。知不善之不當為、而猶或為之、是特未能真知之也。」本条で朱熹は知識の獲得は身に切実でなくてはならないことを強調するが、後世この条を何事も体験する必要があることを説いたものと受け取った

のか、朱子が毒を服用することを説いていると理解するものが出た。清・呂留良『天蓋樓四書語録』卷一九「述而首章」「故今日而實有講明經學之志者、但當篤信朱子而已。所謂篤信者、即如朱子謂砒礬可食、亦當食之。若尚猶豫商量、即不可謂之篤信也。」

(5)「須是如伊川所謂曾經虎傷者一般」「如…一般」は、…と同じだ。「伊川所謂曾經虎傷者」は、本卷三条注、及び四条、五条に既出。

7条

問。進修之術、何先者云云。

曰。物理無窮、故他說得來亦自多端。如讀書以講明道義、則是理存於書。如論古今人物以別其是非邪正、則是理存於古今人物。如應接事物而審處其當否、則是理存於應接事物。所存既非一物能專、則所格亦非一端而盡。

如曰一物格而萬理通、雖顔子亦未至此、但當今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然有箇貫通處。此一項尤有意味。向非其人善問、則亦何以得之哉。 道夫

〔校勘〕

○「問進修之術何先者云云」 成化本は「修」を「脩」に作る。朝鮮古写本は、「云云」二字を欠き、「何先者」の後に以下のように続ける。「程子曰莫先於正心誠意然欲誠意必先致知而致知又在格物」

○「曰物理無窮」 朝鮮古写本は「曰」字の上に「先生」の二字がある。

○「故他說得來亦自多端」 朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。

○「若半青半黃未能透徹」 朝鮮古写本は「半黃」は小字双行に作る。

〔訳〕

質問。「道徳性を向上させるための修養の方法は、何が先でしょうか。」云々（『河南程氏遺書』卷一八）という条についてお尋ねした。先生「物の理は窮まることがなく、だから程伊川は（窮理には）多くの端緒（いとぐち）がある、と言ったのだ。読書して道徳や義理を究明するのは、理が書物にあるからだ。古今の人物を議論してその是非善悪を分析するのは、理が古今の人物にあるからだ。事物に應接して緻密にその当否に対処するのは、理が事物に應接することにあるからだ。（理が）存在する対象は一つの事物に限られるものではないから、格物する対象も一つの端緒（いとぐち）だけで尽くせるものではないのだ。「一つの事物に格つただけで、万理に通暁するというのは、顔子でさえそこには至っていない。ただ、今日一つの事物に格り、明日もまた一つの事物に格り、積み重ねが多くなってから、やっと脱然としてこの貫通するところがあるのだ」というこの一条は非常に味わい深い。その時にこの質問者が上手に質問しなかったならば、どうやってこの答えを得ることができたであろうか。」楊道夫録

〔注〕

(1)「問。進修之術、何先者云云。」 直接には以下の『大学或問』の内容を踏まえる。『大学或問』「又有問進修之術何先者。程子曰。莫

先於正心誠意。然欲誠意、必先致知。而欲致知、又在格物致盡也。格、至也。凡有一物必有一理。窮而致之、所謂格物者也。然而格物亦非一端。如或讀書、講明道義、或論古今人物、而別其是非、或應接事物、而處其當否、皆窮理也。」この『大學或問』の記述は、以下を踏まえる。『河南程氏遺書』卷一八「或問。進修之術何先。曰。莫先於正心誠意。誠意在致知。致知在格物。格、至也。如祖考來格之格。凡一物上有一理、須是窮致其理。窮理亦多端。或讀書、講明義理、或論古今人物、別其是非、或應接事物而處其當、皆窮理也。」

「進修」については卷一七、二八条、注4を参照。「進修」は『周易』「乾卦文言傳」「進德脩業」を踏まえる。「進德脩業」と三綱領八条目の関連については、以下を参照。『大學或問』蓋吾聞之。敬之一字、聖學之所以成始而成終者也。為小學者、不由乎此、固無以涵養本原而謹夫洒掃應對進退之節與夫六藝之教。為大學者、不由乎此、亦無以開發聰明進德修業而致夫明德新民之功也。」

(2) 「如曰一物格而萬理通、雖顔子亦未至此、但當今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然有箇貫通處」直接には以下の『大學或問』の記述を踏まえる。『大學或問』曰。格物者、必物物而格之耶、將止格一物而萬理皆通耶。曰。一物格而萬理通、雖顔子亦未至此。惟今日而格一物焉、明日又格一物焉、積習既多、然後脫然有貫通處耳。」この『大學或問』の記述は以下を踏まえる。『河南程氏遺書』卷一八「曰。怎生便會該通。若只格一物便通衆理、雖顔子亦不敢如此道。須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」また『大學章句』の傳五章、いわゆる格物補傳に「至

於用力之久、而一旦豁然貫通焉」とあるのは、この程子の表現を踏まえる。なお程子の説が顔子の名前を挙げるのは以下を踏まえる。『論語』「公冶長」「回也聞一以知十、賜也聞一以知二。」朱注「聞一知十、上知之資、生知之亞也。」

(3) 「此一項尤有意味」「有意味」は「味わいがある」。『語類』卷一一六、一一七条、訓襲蓋卿(Ⅶ 293)「人之為學、只是爭箇肯不肯耳。他若無得、不肯向這邊、略亦不解致思。他若肯向此一邊、自然有味、愈詳愈有意味。」

(4) 「向非其人善問、則亦何以得之哉。」程朱学では、師の教えを引き出す質問がよい質問として尊ばれた。『論語』「顔淵」「子貢問政」章、集注引程子説「程子曰。孔門弟子善問、直窮到底、如此章者。非子貢不能問、非聖人不能答也。」

8条

問。一理通則萬理通、其說如何。

曰。伊川嘗云。雖顔子亦未到此。天下豈有一理通便解萬理皆通。也須積累將去。如顔子高明、不過聞一知十、亦是大段聰明了。學問却有漸無急迫之理。有人嘗說、學問只用窮究一箇大處、則其他皆通。如某正不敢如此說、須是逐旋做將去。不成只用窮究一箇、其他更不用管、便都理會得、豈有此理。為此說者、將謂是天理、不知却是人欲。明作

〔校勘〕

- 「天下豈有一理通便解萬理皆通」朝鮮古写本は「便」字を欠く。
 ○「如顔子高明不過聞一知十」朝鮮古写本は「聞一知十」を「聞一以知十」に作る。
 ○「亦是大段聰明了」成化本は「段」を「段」に作る。
 ○「學問只用窮究一箇大處則其他皆通」朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る、以下同じ。

〔訳〕

質問。「一理通ずれば、則ち萬理通ず」という説については、いかがでしょう。」

先生「程伊川は「顔子と雖もまた未だ此に至らず」と言った。天下にどうして、一つの理に通曉してすぐに万理についても全て通曉し得る、ということなどあるか。やはり蓄積していくべきなのだ。顔子の高明さが一を聞いて十を知るに過ぎないものであっても、十分に聰明なのだ。学問とは徐々に進むものであって、急ぐ道理など無い。あるものが以前、「学問はひたすら一個の大きなものを窮め尽くせば、その他についても全て通曉する」と言っていた。私は決してそのようには言わず、逐一やっっていくべきだと考える。まさかひたすら一個を窮め尽くすだけで、そのほかは全く関わる必要がなく、すぐに全て理解できてしまう、などということがあるか。どうしてこのような道理があるか。この説を為す者は、これが天理だ、と言おうとしても、逆にそれが人欲であることを知らないのだ。」周明作録

〔注〕

- (1)「問。一理通則萬理通、其説如何。曰。伊川嘗云。雖顔子亦未到此。」「河南程氏遺書」の語を踏まえる。前条の注(2)を参照。
 (2)「如顔子高明、不過聞一知十、亦是大段聰明了」『論語』「公冶長」「子謂子貢曰。女與回也孰愈。對曰。賜也何敢望回。回也聞一以知十、賜也聞一以知二。」集注「一、數之始。十、數之終。二者、一之對也。顔子明睿所照、即始而見終。：胡氏曰。：聞一知十、上知之資、生知之亞也。」「聞一知十」の素質をもつても万里を尽くすことはできないことについては以下を参照。『語類』卷三〇、論語十二、雍也篇「哀公問弟子章」黃義剛録「好古敏以求之、聖人是生知而學者。然其所謂學、豈若常人之學也。聞一知十、不足以盡之。」
 (3)「亦是大段聰明了」「大段」は「十分に」の意。蘇軾『蘇文忠公全集』「東坡續集」卷六「答王定國書」「如國手棋、不須大段用意、終局便須贏也。」
 (4)「學問却有漸、無急迫之理」「急迫」は急いで焦ること。『語類』卷九五、一四九条、沈憫録(VI 252)「曰。道理本自廣大、只是潛心積慮、緩緩養將去、自然透熟。若急追求之、則是起意去趕趁他、只是私意而已、安足以入道。」
 (5)「學問只用窮究一箇大處」陸九淵の思想を念頭におくものと考えられる。陸九淵はしばしば、学問において、「先ず其の大なる者を立てる(先立乎其大)」べきことを強調した。『陸九淵集』卷一「與邵叔誼」「此天之所以與我者、非由外鑠我也。思則得之、得此者也。先立乎其大者、立此者也。積善者、積此者也。集義者、集此者也。」

知徳者、知此者也。進徳者、進此者也。同此之謂同徳、異此之謂異端。」「陸九淵集」卷三四「象山語録」上「近有議吾者云。除了先立乎其大者一句、全無伎倆。吾聞之曰誠然。」なお、「先立乎其大」の語は『孟子』「告子」上「此天之所與我者、先立乎其大者、則其小者弗能奪也。此為大人而已矣。」に基づく。

(6) 「須是逐旋做將去」 「逐旋」は「順を追つて」、「逐一」『語類』卷一五、四條、襲蓋卿録「如一面鏡子、本全體通明、只被昏翳了、而今逐旋磨去、使四邊皆照見、其明無所不到。」などに既出。「…將去」は「…して行く」『語類』卷一五、七六條、葉賀孫録(一 297)「到知得至了、卻恁地平平做將去、然節次自有許多工夫。」などに既出。

(7) 「不成只用窮究一箇」 「不成…」は「まさか…ではあるまい」『語類』卷一四、二四條、黃螢録(一 252)「不成小學全不會知得。」などに既出。(8) 「其他更不用管、便都理會得」 「管」は、構う、関わる、関知する。

9条

叔文問。正心誠意、莫須操存否。

曰。也須見得後、方始操得。不然、只恁空守、亦不濟事。蓋謹守則在此、一合眼則便走了。須是格物。蓋物格則理明、理明則誠一而心自正矣。不然、則戢戢而生、如何守得住。

曰。格物最是難事、如何盡格得。

曰。程子謂。今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然有貫通處。某嘗謂、他此語便是真實做工夫來。他也不說格一件後便會通、也不說

盡格得天下物理後方始通。只云。積習既多、然後脫然有箇貫通處。

又曰。今却不用慮其他、只是箇知至而後意誠、這一轉較難。道夫

〔校勘〕

○「也須見得後」 朝鮮古写本は「須」を「湏」に作る。以下同じ。

○「亦不濟事」 朝鮮古写本は「終亦不濟事」に作る。

○「如何守得住」 朝鮮整版本は「他」を「陀」に作る。以下同じ。

○「曰格物最是難事」 朝鮮古写本は「問格物最是難事」に作る。

○「程子」 朝鮮古写本は「伊川」に作る。

○「真實做工夫來」 成化本、万曆本、呂留良本、伝経堂本、和刻本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「真」を「眞」に作る。

○「方始通」 成化本は「方」を「才」に作る。

○「有箇貫通處」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。

○「今却不用慮其他」 伝経堂本は「却」を「卻」に作る。

〔訳〕

(李) 叔文がお尋ねした。「正心と誠意は心を収斂すること(操存)が必要ですよ。」

先生がおっしゃった。「やはり(道理を)見ることができて初めて(心を)つなぎとめることができる。そうでなければ、ただこうやってむなしく保持しているだけで、やはり役に立たない。思うに、慎んで保持していれば(心は)ここにあっても、ひとたび目を閉じると(心は)すぐにあらぬ方へと逸れていってしまう。格物をしなければならぬ。」

なぜなら物が極めつくされれば理が明らかになり、理が明らかになれば誠であり一であり、心は自然と正しくなる。それでなければ、こまごまと生じてくるものをどうやって保持し続けられるのか。」

(叔文が) 言った。「格物は最も難しいことですが、どうやってすべてを極めつくすことができるのですか。」

先生がおっしゃった。「程子は「今日は一件に格り、明日も一件に格り、蓄積が多くなつてから、やっと貫通するところがある」と言った。私は以前から、彼の言葉は本当に実践をしたからだと思つている。彼は一件を極めつくしたら全体が一理で貫かれる(会通)と言つていないし、天下の物の理をすべて極めつくしたらやっと貫かれるとも言つていない。ただ「蓄積が多くなつてから、やっと貫通するところがある。」と言つている。」

さらにおっしゃった。「今はその他の事は心配しなくてよい。ただ知至してから意識になるが、この一展開はかなり難しい。」 楊道夫録

〔注〕

(1) 「叔文」 李叔文と思われる。『語類』卷一五、六六条、楊道夫録(1995)でも質問を行っている。中純夫編『朱子語類』訳注 卷十五(汲古書院、二〇一五) 一三一頁参照。

(2) 「莫須操存否」「莫須…否」は「…する必要がありますね」。前掲『朱子語類』訳注 卷十五 一三一頁参照。なお、李叔文は同条でも「莫須…否」を使用して質問を行っている。「操存」は心を収斂することを意味する。前掲『朱子語類』訳注 卷十五

一七〇頁参照。出典は『孟子』「告子」上「孔子曰。操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與。」朱注「孔子言、心、操之則在此、舍之則失去、其出入無定時、亦無定處如此。孟子引之、以明心之神明不測、得失之易、而保守之難、不可頃刻失其養。學者當無時而不用其力、使神清氣定、常如平旦之時、則此心常存、無適而非仁義也。」操存は大学の八条目でいえば正心誠意にあたるが、後文にあるように朱熹は「見得」すなわち格物という前提があつて初めて操存が可能になると考えていた。

(3) 「也須見得後、方始操得」「也須…後、方始…」は「やはり…した後でやっと初めて…」。類似の用例としては『語類』卷五九、一四三条、潘時拳録(IV 1408)「也須是有專靜之功、始得。」「見得」は認識することを指し、ここでは後文の「格物」「物格則理明」と内容的に同義。「操得」の「得」は動詞の後ろにつく助詞で可能を表す。朱熹は操存よりも窮理致知が先にくるべきだと考えていた。『語類』卷五、三四条、廖謙録(1988)「古人學問便要窮理知至、直是下工夫消磨惡去、善自然漸次可復。操存是後面事、不是善惡時事。」(4) 「只恁空守、亦不濟事」「恁」は「このように」。「空守」の否定については、『語類』卷五九、一五〇条、鄭可學録(IV 1409)「須是看此心果如何、須是心中明盡萬理、方可。不然、只欲空守此心、如何用得。」「不濟事」は『語類』に頻出する俗語で、だめだ、役に立たないの意(三浦國雄『朱子語類』抄(講談社、二〇〇八) 四六頁)。

(5) 「合眼」「合眼」は、目をつぶること、瞑目すること。『語類』

の別の箇所「合眼」は仏教と結びつけられて批判されている。『語類』卷三一、四二条、楊道夫録（Ⅲ 70）「顔子三月不違仁、豈直恁虚空湛然、常閉門合眼靜坐、不應事、不接物、然後為不違仁也。顔子有事亦須應、須飲食、須接賓客、但只是無一毫私欲耳。」卷六〇、五七条、金去偽録（Ⅳ 132）「如釋氏所謂盡心知性、皆歸於空虛。其所存養、却是閉眉合眼、全不理智道理。」

(6) 「便走了」「了」は文末について新しい状況の出現を表す。垣内景子編『朱子語類』訳注 卷七・十二・十三（汲古書院、二〇一一年）三九〇頁によれば、「走了」は「本来の姿を失ってしまう、変容してしまう、だめになってしまう」「走作」と同じ。『語類』では、本来自分の内側にあるべき心が、外物に引きずられてどこかへ行ってしまうこと（「走」⇨「行く」）をいう例が多い」という。「便走了」の用例としては『語類』卷二二、二一条、程端蒙録（Ⅰ 200）「只外面有些隙罅、便走了。問。莫是功夫間斷、心便外馳否。曰。只此心纔向外、便走了。」

(7) 「物格則理明、理明則誠一、而心自正矣」格物によって理が明らかになることは『朱文公文集』卷六〇「答彭子壽」第一書「然竊聞之、大學於此、雖若使人戒夫自欺、而推其本、則必其有以用力於格物致知之地、然後理明心一、而所發自然莫非真實。」「誠一」については『中庸章句』第二十六章「天地之道、博也、厚也、高也、明也、悠也、久也。」朱注「言天地之道、誠一不貳、故能各極所盛、而有下文生物之功。」「心自正」については『語類』卷一五、一三一条、湯泳録（Ⅰ 307）「誠意正心章、一說能誠其意、而心自正。一說意誠矣、

而心不可不正。」また、前掲『朱子語類』訳注 卷十五「二四三頁、注（一）参照。

(8) 「戢戢而生、如何守得他住」「戢戢」は密集、こまごまとしていることを表す。「得」は動詞の後について補語を導く。「住」は動作の結果が安定することを表す。

(9) 「程子謂。今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然有貫通處」出典は『河南程氏遺書』卷一八「或問。格物須物物格之、還只格一物、而萬理皆知。曰。怎生便會該通。若只格一物、便通衆理、雖顔子亦不敢如此道。須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」「脫然」はここでの意味は「豁然」であるが、もともとは病気がよくなった時に使う。『春秋公羊伝』昭公十九年「復加一飯、則脫然愈。復損一飯、則脫然愈。復加一衣、則脫然愈。復損一衣、則脫然愈。」何休注「脫然、疾除貌也。」

(10) 「他此語便是真實做工夫來」「來」は過去の出来事の回想を表す。程頤が実際に「今日格一件、明日格一件」を行っていたという朱熹の認識は『語類』の別の箇所にも見られる。『語類』卷一〇四、七条、余大雅録（Ⅶ 2612）「舊見李先生說。理會文字、須令一件融釋了後、方更理會一件。融釋二字下得極好、此亦伊川所謂、今日格一件、明日又格一件、格得多後、自脫然有貫通處。此亦是他真曾經歷來、便說得如此分明。」

(11) 「他也不說格一件後便會通、也不說盡格得天下物理後方始通」「也……也……」は「……も……も」。「會通」は個々の理が有機的結びつきを持って全体が一理で貫かれること。前掲『朱子語類』訳注 卷

十五』四三頁、注(6) 参照。

(12) 「知至而後意誠、這一轉較難」「転」は展開や転換を意味する。朱熹は「知至」と「意誠」が凡人と聖人の分かれ目であると考えていた。『語類』卷一五、八七条、楊道夫録(I 299)「知至意誠、是凡聖界分關隘。未過此關、雖有小善、猶是黑中之白。已過此關、雖有小過、亦是白中之黑。過得此關、正好著力進步也。」八八条、周謨録(I 299)「大學所謂知至意誠者、必須知至、然後能誠其意也。今之學者只說操存、而不知講明義理、則此心憤憤、何事於操存也。某嘗謂誠意一節、正是聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在去為君子。不然、則崎嶇反側、不免為小人之歸也。」

10条

問。伊川說。今日格一件、明日格一件。工夫如何。
 曰。如讀書、今日看一段、明日看一段、又如今日理會一事、明日理會一事、積習多後、自然通貫。」德明 德功云。釋氏說斫樹木、今日斫、明日斫、到樹倒時、只一斫便了。

〔校勘〕

- 「伊川說」 朝鮮古写本は「伊川所說」に作る。
- 「今日格一件、明日格一件」 朝鮮古写本にはない。
- 「通貫」 朝鮮古写本では「貫通」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「程伊川が「今日是一件に格り、明日も一件に格る」と言っていますが、実践はどのようにするのですか。」
 先生がおっしゃった。「讀書であれば、今日は一段読み、明日も一段読むようにし、あるいは(何かの事柄に取り組むならば)今日は一つの事に取り組み、明日も一つの事に取り組むようにすれば、(いずれの場合も)蓄積が多くなつた後で、自然と貫通する。」廖德明録 徳功(江黙)が言った。「仏教の話には木を切るのに、今日切つて、明日切つていけば、木を切り倒すときには、一撃すればおしまいだとある。」

〔注〕

- (1) 「伊川說。今日格一件、明日格一件。」前条に既出。
- (2) 「如讀書、今日看一段、明日看一段」 讀書と格物の関係については、『語類』卷一〇、四八条、余大雅録(I 167)「讀書是格物一事。今且須逐段子細玩味、反來覆去、或一日、或兩日、只看一段、則這一段便是我底。脚踏這一段了、又看第二段。如此逐旋捱去、捱得多後、却見頭頭道理都到。」
- (3) 「徳功」 江黙、字は徳功。戴銑『朱子実紀』卷八「江黙、字徳功、崇安人。乾道五年進士。建寧縣令。朱子嘗曰。吾郷士大夫、如徳功者、一意讀書、亦不多得。所著有國朝綱集易訓解・四書訓詁。」
- (4) 「釋氏說斫樹木、今日斫、明日斫、到樹倒時、只一斫便了」 唐代の僧侶・圭峰宗密(七八〇〜八四二)の著作の中に以下のような

一節がある。『禪源諸詮集都序』下（大正、四八冊、四〇七頁）「有云。先因漸修功成、而豁然頓悟。（猶如伐木、片片漸斫、一時頓倒。亦如遠詣都城、步步漸行、一日頓到也。）」（括弧内は双行小注）この表現は永明延寿（九〇四〜九七五）が著した『宗鏡録』卷三六にも見える（大正、四八冊、六二七頁）。また、圭峰宗密の別の著作には下記のようにある。『円覚計略疏鈔』卷四（続藏、第一編、第一套、第三冊、一三二葉）「四十年前、漸修三乘教行、故靈山會中、聞法華經、疑網頓斷、心安如海、授記成佛。如人伐木、千斧萬斧、漸斫倒、即一樹頓倒。又如從邊遠之境、入於京都、數月步步、漸行入大城門之日、一時頓到。」

11条

問。伊川云。今日格得一件、明日格得一件。莫太執著否。
曰。人日用間、自是不察耳。若體察當格之物、一日之間、儘有之。
寓

〔校勘〕

○「莫太執著否」 成化本、万曆本、和刻本、朝鮮古写本は「著」を「着」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「程伊川は「今日は一件に格り、明日も一件に格る」

と言っています。あまりに厳密すぎるのではないのでしょうか」
先生がおっしゃった。「人は日常生活において、自ずと考察を怠っているものだ。もしも格るべき物に対して体察を加えてみたなら、一日の間でもたくさんこれ（格物すべき物）がある。」徐寓録

〔注〕

(1)「今日格得一件、明日格得一件」 九条、一〇条に既出。九条注参照。本来の程頤の言葉は「今日格一件、明日格一件」であるはずだが、本条と次条においては「格」の後ろに「得」が添えられている。おそらく音調を整えるためであって、「得」に意味はない。前掲三浦國雄『朱子語類』抄』三四頁参照。

(2)「執著」「執著」は窮屈や厳密を表し、悪い意味で使うことが多い。例えば、s『語類』卷六三、四二条、鍾震録（IV 1530）「中立而不倚。凡或勇或辨、或聲色貨利、執著一邊、便是倚著。立到中間、久久而不偏倚、非強者不能。」ただし、朱熹は執著を救いようのない行為だと見なしていたわけではない。『朱文公文集』卷三九「答許順之」第四書「大抵齊仲・順之、失之太幽深（順之尤甚）、而三公失之太執著（執著者、有時而通。幽深者、蕩而不反矣。）」（括弧内は双行小注）

(3)「人日用間、自是不察耳」この「察」は直後の「體察」と同じである。同様の表現としては、『語類』卷七四、一二七条、林学蒙録（V 1898）「問。仁者見之至鮮矣。曰。此言萬物各具是性、但氣稟不同、各以其性之所近者窺之。故仁者只見得他發生流動處、便以

為仁。知者只見得他貞靜處、便以為知。下此一等、百姓日用之間、習矣而不察、所以君子之道鮮矣。」「不察」の出典は『孟子』「尽心」上「孟子曰。行之而不著焉、習矣而不察焉、終身由之、而不知其道者、眾也。」朱注「著者、知之明。察者、識之精。言方行之而不能明其所當然、既習矣而猶不識其所以然、所以終身由之而不知其道者多也。」

12条

窮理者、因其所已知而及其所未知、因其所已達而及其所未達。人之良知、本所固有。然不能窮理者、只是足於已知已達、而不能窮其未知未達、故見得一截、不曾又見得一截、此其所以於理未精也。

然仍須工夫日日增加。今日既格得一物、明日又格得一物、工夫更不住地做。如左脚進得一步、右脚又進一步、右脚進得一步、左脚又進一步、繼續不已、自然貫通。 洽

〔校勘〕

○「不曾又見得一截」 朝鮮古写本は「曾」を「曾」に作る。

○「然仍須工夫」 朝鮮古写本は「須」を「湏」に作る。

○「日日増加」 朝鮮古写本は「増」を「増」に作る。

○「如左脚進得一步」 成化本、朝鮮古写本は「歩」を「歩」に作る。

以下同じ。

○「洽」 朝鮮古写本は「治」に作る。

〔訳〕

「理を極めるといふのは、そのすでに知っているところに基づいてそのまだ知らないところに及ぼし、そのすでに達しているところに基づいてそのまだ達していないところに及ぼすものだ。人の良知は、もともと備わっている。しかし理を極めることができないのは、ただすでに知っているところやすでに達しているところに満足して、その知らないところや達していないところを極めることができず、ゆえに一段を見たら、その上さらにもう一段を見ようとは全くしない、これがその理においてまだ精確でない理由だ。」

しかしなお工夫を日々増加させていかななくてはならない。今日は一物に格り、明日もさらに一物に格り、工夫は休まずに行う。左足が一步進んだら、右足がさらに一步進み、右足が一步進んだら、左足がさらに進むように、継続してやむことがなければ、自然と貫通する。」

張洽録

〔注〕

(1)「窮理者、因其所已知而及其所未知」「已知」によって「未知」を知ることについては、『大学章句』伝五章「聞嘗竊取程子之意、以補之曰。所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈莫不有知、而天下之物莫不有理、惟於理有未窮、故其知有不盡也。是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則眾物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格、此

謂知之至也。』『朱文公文集』卷四七「答吳梅叔」第七書「致知云者、因其所已知者、推而致之、以及其所未知者、而極其至也。是必至於舉天地萬物之理、而一以貫之、然後為知之至、而所謂誠意正心修身齊家治國平天下者、至是而無所不盡其道焉。」卷五九「答陳才卿」第五書「格物致知、亦是因其所已知者推之、以及其所未知、只是一本、元無兩樣工夫也。」卷六四「答姚棣」「蓋嘗聞之、人之一身、應事接物、無非義理之所在、人雖不能盡知、然其大端、宜亦無不聞者、要在力行其所已知、而勉求其所未至、則自近及遠、由粗至精、循循有序、而日有可見之功矣。」(統集卷四「答盧提翰」も同じ)『語類』卷一五、四八条、黃義剛錄(Ⅰ 29)「劉圻父說格物致知。曰。他所以下格字、致字者、皆是為自家元有是物、但為他物所蔽耳。而今便要從那知處推開去、是因其所已知、而推之以至於無所不知也。」

(2)「人之良知、本所固有」『孟子』「尽心」上「孟子曰。人之所不知而能者、其良能也。所不慮而知者、其良知也。孩提之童、無不知愛其親者、及其長也、無不知敬其兄也。親親、仁也。敬長、義也。無他、達之天下也。」朱注「良者、本然之善也。程子曰。良知良能、皆無所由、乃出於天、不繫於人。』『語類』卷一四、九二条、廖德明錄(267)「其良知良能、本自有之、只為私欲所蔽、故暗而不明。所謂明明德者、求所以明之也。」

(3)「見得一截、不會又見得一截」「一截」は「一段、一層」。前掲『朱子語類』詠注 卷十五「二八七頁参照。「會」は否定の強調。前掲三浦國雄『朱子語類』抄』七一頁参照。

(4)「然仍須工夫更不住地做」「然仍」は逆接では文脈に合わないた

め、「仍然」と同じく「やはり」という意味だと考えられる。「住」は停止する。「地」は副詞句を作る。「不住地」で「やむことなく」を表す。「不住地」の用例としては、『語類』卷一〇、七七条、甘節録(Ⅰ 172)「某自潭州來、其他盡不會說得、只不住地說得一箇教人子細讀書。」

(5)「如左脚進得一步、右脚又進一步、右脚進得一步、左脚又進」同様の比喩は『語類』卷一一八、七二条、潘植録(Ⅶ 2856)「植因問顏子博文約禮、是循環工夫否。曰。不必說循環。如左脚行得一步了、右脚方行得一步、右脚既行得一步、左脚又行得一步。此頭得力、那頭又長、那頭既得力、此頭又長、所以欲罷而不能。」

(6)「接續不已」『語類』卷一六、二二条、廖德明録(Ⅱ 318)「湯日日新。書云。終始惟一、時乃日新。這箇道理、須是常接續不已、方是日新、才有間斷、便不可。」

13条

黃毅然問。程子說。今日格一件、明日格一件。而先生說要隨事理會。恐精力短、如何。

曰。也須用理會。不成精力短後、話便信口開、行便信脚步、冥冥地去、都不管他。

又問。無事時見得是如此、臨事又做錯了、如何。

曰。只是斷置不明。所以格物、便要閒時理會、不是要臨時理會。閒時看得道理分曉、則事來時斷置自易。格物只是理會未理會得底、不

是從頭都要理會。

如水火、人自是知其不可蹈、何曾有錯去蹈水火。格物只是理會當蹈水火與不當蹈水火、臨時時斷置教分曉。程子所謂、今日格一件、明日格一件、亦是如此。

且如看文字、聖賢說話粹無可疑者、若後世諸儒之言、喚做都不是、也不得。有好底、有不好底、好底裏面也有不好處、不好底裏面也有好處、有這一事說得是、那一件說得不是、有這一句說得是、那一句說得不是、都要恁地分別。如臨事、亦要如此理會那箇是、那箇不是。若道理明時、自分曉。

有一般說、漢唐來都是、有一般說、漢唐來都不是、恁地也不得。且如董仲舒賈誼說話、何曾有都不是底、何曾有都是底。須是要見得他那箇議論是、那箇議論不是。如此、方喚做格物。如今將一箇物事來、是與不是見得不定、便是自家這裏道理不通透。若道理明、則這樣處自通透。」淳 黃自錄詳、別出。

〔校勘〕

○「也須用理會」朝鮮古写本は「須」を「湏」に作る。以下同じ。

○「都不管他」朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。以下同じ。

○「便要閒時理會」成化本、万曆本、和刻本、朝鮮古写本は「閒」を「閑」に作る。以下同じ。

○「何曾有錯去蹈水火」万曆本、朝鮮古写本は「曾」を「曽」に作る。以下同じ。

○「亦要如此理會那箇是」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。

下同じ。

○「那箇議論是」朝鮮古写本にはない。

○「淳」伝経堂本は「澹」に作る。

○「黃自錄詳、別出。」朝鮮古写本にはない。朝鮮古写本では14条が13条より前に配置されているためである。

〔訳〕

黄毅然（黄義剛）がお尋ねした。「程子は「今日は一件に格り、明日も一件に格る」と言っています。先生も、事物に応じてそのつど取り組まなくてははいけなとおっしゃいました。けれども氣力が弱かったらどうしたらいいのでしょうか。」

先生がおっしゃった。「やはり取り組まなくてははいけない。まさか氣力が弱いからといって、口に任せて喋ったり、足に任せて歩いたり、わけもわからないままにやっていると、それらを全て放っておく、などというわけにもいくまい。」

さらにお尋ねした。「何もない時には、これこれだとわかったつもりでいたのに、いざ事に臨んだら失敗してしまうのは、どうしてでしょう。」

先生がおっしゃった。「それは判断・措置が明らかでなかったからに他ならない。だから格物は、何事もないうちにこそ取り組んでおかななくてはならず、事に臨んでから取り組もうとするものではない。何事もないうちに道理をはっきりと理解すれば、事が起こった時に判断・措置が簡単になる。格物はまだ取り組んでいないことに取り組むこと

にほかならず、頭からすべて取り組まなくてはいけないわけではない。たとえば水火について、人はおのずとそれを踏んではいけないと知っていて、どうして間違えて水火を踏みに行くことがあるか。格物とは、水火は踏むべきなのか水火は踏むべきではないのかを理解することに他ならないのであって、事に臨む時に判断・措置をはっきりさせるのだ。程子が言った「今日は一件に格り、明日も一件に格る」というのもこれと同様である。

たとえば文章を読むと、聖賢の言説は純粹で疑わしいものがないが、後世の儒者たちの言葉についても、すべて正しくないと称するものもよくない。よいものもあるし、よくないものもある。よいものの中にもよくないところがあるし、よくないものの中にもよいところがある。この一事は正しく説いているが、あの一件は間違つて説いている、というのもある。この一句は正しく説いているが、あの一句は間違つて説いている、というのもある。すべてこのように分別していかないといけない。事に臨む場合にもやはりこのように、あれは正しく、あれは正しくないと、と理解しなくてはいけない。もし道理が明らかな時であれば、自然とはつきりする。

漢唐以来すべて正しいという人もいるし、漢唐以来すべて正しくないとという人もいるが、こんな説き方をするのもやはりよくない。たとえば董仲舒や賈誼の言説は、どうしてすべて正しくないことがあるのか、どうしてすべて正しいことがあるのか。彼らのどの議論が正しくて、どの議論が正しくないのかを理解する必要がある。このようであつてこそ、初めて格物と称する。もし今一つの事物がやって来て、正し

いか正しくないか見て定まらないなら、それは自分が道理をすっかり了解していないからだ。もし道理が明らかであれば、このようなところは自然とすっかり了解できる。」陳淳録 黄義剛自身の記録が詳しく、別条とした。

〔注〕

(1)「黄毅然」黄義剛の字が毅然である。陳淳と黄義剛の同席について、田中謙二「朱門弟子師事年攷」(『田中謙二著作集』第三卷(汲古書院、二〇〇二年)所収)一四六頁によれば、慶元五年(一一九九)から翌六年(一二〇〇)年頭のことである。

(2)「先生説要隨事理會」『語類』卷一五、二三條、曾祖道録(II 88)。「遇事接物之間、各須一一去理會始得。不成是精底去理會、粗底又放過了、大底去理會、小底又不問了。如此、終是有欠闕。但隨事遇物、皆一一去窮極、自然分明。」

(3)「不成精力短後」「不成」は「まさか：ではあるまい」を意味する。中純夫編『朱子語類』訳注 卷十四(汲古書院、二〇一四年)三三頁に既出。「精力」は日本語の精力のような肉体的な力ではなく、気力や根性を表す。「短後」はどちらの漢字も弱いことを表しており、この二文字で「劣る、弱い」という意味。次条では「強」と対比されている。また、『語類』の別の用例として、『語類』卷一一五、五八條、記録者名欠(Ⅶ 28)「問。非是讀書過當倦後如此。是纔收斂來、稍久便困。曰。便是精神短後如此。」

(4)「話便信口開、行便信脚步」「信」は「…に任せる」。同様の表

現としては『語類』卷六二、一一一条、呂燾録（IV 1509）「問。發而皆中節、是無時而不戒慎恐懼而然否。曰。是他合下把握、方能發而中節。若信口説去、信脚行去、如何會中節。」

(5) 「冥冥地去、都不管他」「冥冥地去」は真つ暗な中を進むことを表している。「管」は「関知する」。

(6) 「斷置」判断と措置。『語類』卷一四〇、一一三条（Ⅷ 3342）「斷置、言倒斷措置也。」

(7) 「所以格物、便要閑時理會、不是要臨時理會。閑時看得道理分曉、則事來時斷置自易。」「閑時」と「臨時」は対表現である。「閑」は「閑」であり、原文前行の「無事時」と同じ意味である。何もないひまな時にこそ取り組むべきだということは、『語類』卷一五、一三八条、周明作録（I 308）「大抵閑時喫緊去理會、須要把做一件事看、横在胸中、不要放下。若理會得透徹、到臨時時、一一有用處。而今人多是閑時不喫緊理會、及到臨時時、又不肯下心推究道理、只說且放過一次亦不妨。只是安于淺陋、所以不能長進、終於無成。大抵是不曾立得志、枉過日子。且如知止、只是閑時窮究得道理分曉、臨時時方得其所止。若閑時不曾知得、臨事如何了得。事親固是用孝、也須閑時理會如何為孝、見得分曉、及到事親時、方合得這道理。事君亦然。以至凡事都如此。」

(8) 「理會未理會得底」「未理會得底」は、まだ取り組めていないこと。「得」は可能を表す。「底」は現代中国語の「的」に相当し、ここでは動詞を名詞化している。

(9) 「如水火、人自是知其不可蹈、何曾有錯去蹈水火」水火を踏む

という表現については、『論語』「衛靈公」「子曰。民之於仁也、甚於水火。水火吾見蹈而死者矣。未見蹈仁而死者也。」

(10) 「好底裏面也有不好處」「裏面」は「∴の中」を表す。

(11) 「有一般説」「一般」は「ある種の、一種の」を表す。前掲『朱子語類』訳注 卷十四 三五頁、『朱子語類』訳注 卷十五 五〇、二八一頁参照。

(12) 「如董仲舒賈誼説話、何曾有都不是底、何曾有都是底」朱熹の董仲舒・賈誼の評価について、孟淑慧『朱熹及其門人的教化理念与实践』（台湾大学出版中心、二〇〇三年）一一一頁は「彼は賈誼・董仲舒についても評論している。彼は賈誼の学問は雜駁で、戦国時代の縦横家の学問に似ていると考えた。さらに董仲舒の学問は純粹で、純儒であると言った。（他對賈誼、董仲舒也有評論。他認為賈誼的學問龐雜，近似戰國縱橫之學；又說董仲舒學問純粹，是純儒。）」と述べている。確かに、『語類』卷一三五、四七条、卷一三七、一八条、一九条だけを見れば朱熹の董仲舒観や賈誼観をそのようにとらえることも可能である（参考資料①）。しかし、実際には本条にあるように、朱熹は董仲舒・賈誼に対しては々々非々の態度であった。朱熹は董仲舒について、賢良対策（董仲舒が武帝に対して行った建言）については低い評価を下している（『語類』卷一三七、二六条、二七条、三四条【参考資料②】）が、人格や学識、江都易王に行った建言（正誼明道）については高い評価を与えている（卷一三七、二二条、二五条、三〇条、三一条、三三条、三四条、三五条、卷一三九、一一一条【参考資料③】）。また、賢良対策についても、部

分的には評価している(『語類』卷一三七、二八条、二九条、三〇条【参考資料④】)。一方、朱熹は賈誼については、才能や文才については高く評価していた(『語類』卷一三六、六五条、卷一三九、一一条【参考資料⑤】)。

(13)「黄自録詳、別出」次条を指す。

【参考資料①】

『語類』卷一三五、四七条、記録者名欠(Ⅷ 3297)「漢儒董仲舒較穩。劉向雖博洽而淺、然皆不見聖人大道。賈誼・司馬遷皆駁雜、大意是說權謀功利。說得深了、覺見不是、又說一兩句仁義。然權謀已多了、救不轉。」卷一三七、一八条、沈憫録(Ⅷ 3297)「賈誼之學雜。他本是戰國縱橫之學、只是較近道理、不至如儀秦蔡范之甚爾。他於這邊道理見得分數稍多、所以說得較好。始終是有縱橫之習、緣他根脚只是從戰國中來故也。漢儒惟董仲舒純粹、其學甚正、非諸人比。只是困苦無精彩、極好處也只有正誼・明道兩句。」一九条、鄭可學録(Ⅷ 3299)「又問。賈誼與仲舒如何。曰。誼有戰國縱橫之氣。仲舒、儒者、但見得不透。」

【参考資料②】

『語類』卷一三七、二六条、記録者名欠(Ⅷ 3262)「問。性者、生之質。曰。不然。性者、生之理。氣者、生之質、已有形狀。」二七条、滕璘録(Ⅷ 3262)「問。仲舒云。性者、生之質。也不是。只當云、性者、生之理也。氣者、生之質也。璘謂。性者、生之質、本莊子之言。曰。莊子有云。形體保神、各有儀則、謂之性。前輩謂此說頗好、如有物有則之意。」

三四条、記録者名欠(Ⅷ 3263)「漢初諸儒專治訓詁、如教人亦只言某字訓某字、自尋義理而已。至西漢末年、儒者漸有求得稍親者、終是不曾見全體。…唯董仲舒三篇說得稍親切、終是不脫漢儒氣味。只對江都易王云。仁人正其義不謀其利、明其道不計其功、方無病。又是儒者語。」

【参考資料③】(『語類』卷一三七、三四条は【参考資料②】に既出)

『語類』卷一三七、二一条、沈憫録(Ⅷ 3260)「董仲舒自是好人。」二五条、林恪録(Ⅷ 3262)「只有董仲舒實質純良、摸索道得數句著、如正誼不謀利之類。然亦非它真見得這道理。」三〇条、楊道夫録(Ⅷ 3263)「仲舒言。命者、天之令、性者、生之質。如此說、固未害。下云。命非聖人不行、便牽於對句、說開去了。如正誼明道之言、却自是好。」二二条、記録者名欠(Ⅷ 3263)「建寧出正誼明道如何論。先生曰。正其誼不謀其利、明其道不計其功。誼必正、非是有意要正。道必明、非是有意要明。功利自是所不論。仁人於此有不能自己者。師出無名、事故不成。明其為賊、敵乃可服。此便是有意立名以正其誼。」三三条、記録者名欠(Ⅷ 3263)「仲舒所立甚高。後世之所以不如古人者、以道義功利關不透耳。其議匈奴一節、尊敬賈誼智謀之士為之、亦不如此。」三五条、甘節録(Ⅷ 3263)「董仲舒、才不及陸宣公、而學問過之。」卷一三九、一一条、万人傑録(Ⅷ 3299)「漢初賈誼之文質實。…董仲舒之文緩弱、其答賢良策、不答所問切處、至無緊要處、有累數百言。」

【参考資料④】

『語類』卷一三七、二八条、楊道夫録(Ⅷ 3262)「問。仲舒以情為人之欲、

如何。曰。也未害。蓋欲為善、欲為惡、皆人之情也。」二九条、陳淳録(Ⅷ 323)「童問董仲舒見道不分明處。曰。也見得鶻突。如命者、天之令、性者、生之質、情者、人之欲、命非聖人不行、性非教化不成、情非制度不節等語、似不識性善模樣。又云。明於天性、知自貴於物、知自貴於物、然後知仁義、知仁義、然後重禮節、重禮節、然後安處善、安處善、然後樂循理、又似見得性善模樣。終是說得騎牆、不分明端的。」三〇条、楊道夫録(Ⅷ 323)「仲舒言。命者、天之令、性者、生之質。如此說、固未害。下云。命非聖人不行、便牽於對句、說開去了。如正誼明道之言、却自是好。」

【參考資料⑤】(『語類』卷一三九、一一一条は【參考資料③】に既出)

『語類』卷一三六、六五条、楊道夫録(Ⅷ 323)「史以陸宣公比賈誼。誼才高似宣公、宣公諳練多、學便純粹。大抵漢去戰國近、故人才多是粹。」

14条

問。陸先生不取伊川格物之說。若以爲隨事討論、則精神易弊、不若但求之心、心明則無所不照、其說亦似省力。

曰。不去隨事討論後、聽他胡做、話便信口說、脚便信步行、冥冥地去、都不管他。義剛曰。平時明知此事不是、臨時却做錯了、隨即又悔。此畢竟是精神短後、照燭不逮。

曰。只是斷制不下。且如有一人牽你出去街上行、不成不管後、只聽

他牽去。須是知道那裏不可去、我不要隨他去。

義剛曰。事卒然在前面、卒然斷制不下、這須是精神強、始得。

曰。所以格物、便是要問時理會、不是要臨時理會。如水火、人知其不可蹈、自是不去蹈、何曾有人錯去蹈水火來。若是平時看得分明時、卒然到面前、須解斷制。若理會不得時、也須臨時時與盡心理會。十分斷制不下、則亦無奈何。然亦豈可道曉不得後、但聽他。

如今有十人、須看他那箇好、那箇不好。好人也有做得不是、不好人也有做得是底。如有五件事、看他處得那件事、那件事不是。處得是、又有曲折處。

而今人讀書、全一例說好底、固不是。但取聖人書、而以爲後世底皆不足信、也不是。如聖人之言、自是純粹。但後世人也有說得是底、如漢仲舒之徒。說得是底還他是。然也有不是處、也自可見。須是如此去窮、方是。

但所謂格物、也是格未曉底、已自曉底又何用格。如伊川所謂今日格一件、明日格一件、也是說那難理會底。 義剛

〔參考〕

本条は本卷一三条、陳淳録の記録者名下に「黃自録詳、別出」といわれる黃義剛の自録であり、同一の問答を記録している。

〔校勘〕

○「義剛曰」朝鮮古写本は「曰」を「云」に作る。下の「義剛曰」も同じ。

○「聽他胡做」朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。下文並びに同じ。

○「臨時却做錯了」 伝経堂本は「却」を「卻」に作る。

○「只是斷制不下」 朝鮮古写本は「斷」を「断」に作る。下文並びに同じ。

○「且如有一人牽你出去街上行」 朝鮮古写本は「一」の下に「个」字有り、朝鮮整版本は「你」を「你」に作る。

○「事卒然在面前」 成化本、朝鮮古写本は「面」を「面」に作る。下文並びに同じ。

○「這須是精神強」 萬曆本、和刻本は「強」を「強」に作る。

○「便是要開時理會」 成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「開」を「開」に作る。

○「則亦無奈何」 萬曆本、呂留良本、伝経堂本、朝鮮古写本、和刻本は「奈」を「柰」に作る。

○「然亦豈可道曉不得後」 萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「曉」を「曉」に作る。下文並びに同じ。

○「須看他那箇好」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。下文並びに同じ。

○「而以爲後世底皆不足信」 萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「爲」を「為」に作る。

○「已自曉底又何用格」 成化本、萬曆本、和刻本は「已」を「巳」に作る。

〔訳〕

お尋ねした。「陸象山先生は程伊川の格物の説を採用しませんでした。事ごとに究明してなどいたら精神が容易に疲れ切ってしまうから、

ひたすら心のうちに求めるに越したことはない、心が明らかであれば照らせないところははない、と（陸先生は）考えているようで、その説は効率的なようにも思われるのですが。」

おっしゃった。「事ごとに究明していかずにでたらめに任せるとなれば、話をするには口から出任せ、歩くには足の向くまま、というわけで、わけもわからないままにやって、しかもそれを放っておく、ということになってしまう。」

私義剛が言った。「何も無い時にははつきりとこのことは良くない、と分かっているのに、いざ事に臨むとし損じてしまい、すぐに後悔します。これは結局のところ、精神力が劣っていて（物事の理を）明らかにする力が及ばない、ということでしょうか。」

おっしゃった。「ただ判断・措置が不十分だからに過ぎない。たとえばある人が君を連れて大通りに出て行ったとして、まさか後先考えずにひたすらその人に引つ張られていくというのか。必ず、どこどこには行ってはいけないと分かっている、（もしも行ってはいけない場所）に連れて行こうとしたら（私は彼にはついて行かないぞ、という風でなければならぬ。」

私義剛が言った。「物事が突然目の前に現れた時、即座に判断・措置ができないのですが、これは強靱な精神力をもってはじめて対処できるようなる、ということなのでしょう。」

おっしゃった。「だから格物というものは何事もなく余裕のある時にとりくんでおくものであって、その場に至って取り組むものではない。たとえば水火について、人はそれを踏んではいけないと知っている

るので、自然それを踏みに行ったりなどしない。どうして間違えて水火を踏みに行った者などがいただろうか。もし日頃はつきり物事の分別がついていたなら、突然目の前に現れたとしても、必ずや正しく判断・措置することができる。もしまだ取り組めていなかったとしても、やはり必ず物事に直面した時に全力でとりくまなくてはならない。十分に判断・措置ができなかったとして、それはもうどうしようもない。しかし、だからと言ってまさか頑張ってもわからない対象に直面した場合、ひたすら成り行き任せにしてしまえ、などと言うわけにもいくまい。

今十人の人がいたとしたら、それらのどれが正しく処置できていてどれが正しく処置できていないのかを見なければならぬ。良い人であつても正しくない行いをするものはあるし、良くない人であつても正しい行いをするものはある。五つの物事があつたとしたら、必ずやそれらのどれが正しくてどれが正しくないのかを見なければならぬ。正しく処置しているにせよ、そこには細々とした問題があるものだ。

なのに、今時の人々が書物を読む時、何を読んでも一律にこれは良い、などと言うのは、全くけしからんことだ。ただ聖人の書物だけを採用して、後世の書物などどれも信じるに値しない、などと考えるのもやはりけしからん。聖人の言葉などは当然全く間違いの混じつていないものだ。しかし、後世の人であつても正しいことを言っていることはある、漢の董仲舒たちのように。正しいことを言っているところは（後世の人物の説であるとはいえ）やはり正しいのだ。同時にそこ

には正しくないところもあるわけだが、それもどれが正しくないのかは自然と区別がつくものだ。必ずこのようにして理を極めていって、それではじめて正解だ。

所謂格物というものは、まだわかっていないものに格るのだ。もうわかっていることなどどうして格る必要があるのか。程伊川の言つた「今日は一件に格り、明日も一件に格る」というのも、その取り組むのが難しいもののことを言っているのだ。」黄義剛録

〔注〕

(1)「陸先生」陸九淵を指す。陸九淵のことを「陸先生」と呼ぶ例は、『朱子語類』全体を通じて本条の他、包揚、呉振、陳文蔚の記録にのみ見られる。

(2)「隨事討論」「討論」は「究明する」。本条に見られる程頤の説に対する陸九淵の批判と完全に一致する言葉は見られないが、『象山集』卷三五「語録」下に「伯敏云。如何様格物。先生云。研究物理。伯敏云。天下萬物不勝其繁、如何盡研究得。先生云。萬物皆備於我、只要明理。然理不解自明、須是隆師親友」とあり、陸九淵の格物解釈が示されている。なお、吉田公平氏は陸九淵の語録のこの条について、「この問答で李伯敏が疑義を提示している格物論が、朱熹の格物論をもとにしていることは明らかである。朱熹の格物論に対してこのような疑問をいだく者がすでに存在していたことは興味深い。この疑問に対して、陸象山が答えた「格物」論は、朱熹のそれとは異なり、あげて本来完全である本心が先天的に固有する理

を發明することであつた。」と指摘する（『陸象山と王陽明』研文出版、一九九〇、八九頁）。

(3) 「心明則無所不照」この語は古くは『白虎通』に於いて、聖人の境地として用いられた。『白虎通』卷六「聖人」「聖人者何。聖者、通也、道也、聲也。道無所不通、明無所不照、聞聲知情、與天地合德、日月合明、四時合序、鬼神合吉凶。」また、朱熹に於いては『大學』の格物とも関連して用いられる。『朱文公文集』卷五〇「答潘文叔」一「大學所謂格物致知、乃是即事物上窮得本來自然當然之理、而本心知覺之體、光明洞達、無所不照耳。非是回頭向壁隙間窺取一霎時間己心光影、便爲天命全體也。」

(4) 「省力」 手間暇を省くことができる。

(5) 「後」は具体的な因果関係を示さない、語氣助詞に近い用法か（太田辰夫『中国語歴史文法』、朋友書店、二〇〇三年、三七三頁）。

(6) 「信口説」「信」は「なるがままに任せる」。

(7) 「隨即」「すぐに」、「ただちに」。

(8) 「精神短後」「短後」は二文字で「劣る」。

(9) 「照燭不逮」「燭」は理などを明らかにすることとして多く用いられる。卷一七、一五條、劉砥録「然心若昏昧、燭理不明」注参照（『朱子語類』卷一四〜一八訳注（八）（『京都府立大学学術報告・人文』六八号、二〇一六年））。

(10) 「不成不管後」「不成A」は「まぢかAだともごうのか」。張相『詩詞曲語辭匯釋』卷四・不成「不成、猶云難道也。」（中華書局、一九五三年、四五一頁）

(11) 「只聽他」この「他」は直前の「有一人」を受け、仮設された人物を指す。

(12) 「斷制不下」「下」は「下」することができなくなる」。

(13) 「須解斷制」「須解」は「必ずすることが出来る」。

(14) 「須看他那箇好」「他」は「彼ら」。「近代漢語詞典」「他」④「表第三人稱複數、相當于「他們」。」（二〇四頁）

(15) 「全一例」全一律に。

(16) 「但取聖人書、而以爲後世底皆不足信」『漢書』卷八七上「揚雄傳」上「自有大度、非聖哲之書不好也、非其意、雖富貴不事也。」揚雄以來、後漢の周燮（字は彦祖）、唐の柳公綽（字は起之、書家の柳公權の兄）など歴代散見する主張。『詩話總龜』後集卷六「李陽水云。太白（李白）不讀非聖人之書、恥爲鄭衛之作。故其言多似天仙之辭。」や、呂本中『童蒙訓』卷上「誠伯叔父明之（北宋の人・田賡、字は誠伯、の叔父・田述古、字は明之）、亦老儒也。然專讀經書、不讀子史、以爲非聖人之言、不足治也。誠伯以爲不然、曰。博學而詳說之、將以反說約也。如不遍覽、非博學詳說之謂。」など。

(17) 「已自」二文字で「すでに」。

(18) 「如伊川所謂今日格一件、明日格一件」『河南程氏遺書』卷一八「須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」

15 條

積習既多、自當脫然有貫通處、乃是零碎碎湊合將來、不知不覺、

自然醒悟。其始固須用力、及其得之也、又却不假用力。此箇事不可欲速、欲速則不達、須是慢慢做去。 人傑

〔校勘〕

○「積習既多」朝鮮古写本は「積」の上に「又曰」二字がある。

○「乃是零零碎碎湊合將來」和刻本は「湊」を「湊」に、「來」を「來」に作る。

○「又却不假用力」伝経堂本は「却」を「卻」に作る。

○「此箇事不可欲速」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

〔訳〕

「蓄積が多くなつてから、おのずから必ずからつと貫通する境地がある」と（という程子の言葉）はつまり、ばらばらの細々としたものを寄せ集めることによつて、知らず知らずのうちにおのずと会得することなのだ。その始めの段階ではやはり努力しなくてはならないのだが、貫通の段階に至ると努力をする必要もなくなる。この貫通という段階には、早く到達してやろうなどと意識してはいけない。「早くしよう」と意識すれば達成できない」と孔子もおっしゃったではないか、ゆっくりと進んでいかなくてはならないのだ。 萬人傑録

〔注〕

(1) 「積習既多、自當脫然有貫通處」元は二程の語録に見える言葉であり、『大學或問』に於いて朱熹はこれを引いて議論を展開した。

本巻七条、楊道夫録(Ⅱ 39)等に既出。巻一四、一二五条、葉賀孫録、『朱子語類』訳注 卷十四「一九八〜二〇〇頁(汲古書院、二〇一三年)参照。また、吾妻重二氏は、朱熹の窮理説に於けるこのような考え方について、「豁然として貫通する」あるいは「脱然として悟る」というのは、論理学でいう「帰納の飛躍」(inductive leap)に相当すると見てよい。周知のように、帰納法においては、関連事項を完全枚挙することは事実上不可能であるため、したがって個々の前提から一般的結論に達するさい、ある種の飛躍が必要になるのである。つまり、帰納のはてに、全体を貫く道理にあるときはつと気づく、その状態が「一旦豁然として貫通する」ことだと考えられる。」とし、また、本条を引いて「そのような個別から一般に至る認識の過程と、その間に介在する論理上の飛躍という特色を、よくあらわしているではないか」と指摘する(『朱子学の新研究』創文社、二〇〇四年、三三二・三三三頁)。

(2) 「零零碎碎」ばらばらであり、細々としているさまを表す形容詞「零碎」の重ね形。

(3) 「湊合將來」「湊合」は「寄せ集める」、「綜合する」。「將來」は動詞について、「…してくる」、「…していく」。

(4) 「欲速則不達」「論語」「子路」「子夏爲莒父宰問政。子曰母欲速、母見小利。欲速則不達、見小利則大事不成。」朱熹集注「欲事之速成、則急遽無序而反不達。」

(5) 「慢慢」速度が遅いさまを表す形容詞「慢」の重ね形。巻一四、八一条、葉賀孫録(Ⅰ 263)に既出。

問。自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。

曰。此一段、尤其切要、學者所當深究。

道夫曰。自一身以至萬物之理、則所謂由中而外、自近而遠、秩然有序而不迫切者。

曰。然。到得豁然處、是非人力勉強而至者也。 道夫

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一八にはこの条が見えない。

○「尤其切要」萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「切要」を「要切」に作る。

○「學者所當深究」呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本は「深」を「淡」に作る。

○「是非人力勉強而至者也」成化本、朝鮮整版本は「勉強」を「強勉」に作る。

〔訳〕

「自分自身のことから万物の理に至るまで、とりくんだ対象が多くなれば、おのずから必ずどこからと会得する境地が存在するものだ」という言葉についてお尋ねした。

お答え。「この一節はとりわけ重要で、学ぶ者は深く研究しなくてはならない。」

私道夫が言った。「自分自身のことから万物の理に至るまで、とい

うのは、いわゆる、内から外まで、近くから遠くまで、整然として（貫通に至るまでの）順序が存在するものではあるが、（貫通を）意識しすぎてはいけない、ということでしょうか。」

お答え。「そうだ。からとと会得する境地というのは、人の力ではなくか頑張ることによって到達することができるというようなものではない。」 楊道夫録

〔注〕

(1) 「自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處」元は二程の語録に見える言葉であり、『大學或問』に於いて朱熹はこれを引いて議論を展開した。『大學或問』「又曰。自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。」また、『河南程氏遺書』卷一七「今人欲致知、須要格物。物不必謂事物然後謂之物也。自一身之中、至萬物之理、但理會得多幾次、自然豁然有覺處。」

(2) 「所謂由中而外、自近而遠、秩然有序而不迫切者」朱熹もしくはその先人にこのような言葉があったことを踏まえての発言と思われるが、未詳。本卷七九条、楊道夫録（II 409）は「問由中而外、自近而遠。」から始まっており、『大學或問』中の語であるように思われるが、現行本及び元刊本『大學章句』（中華再造善本影印本）に附刻される『大學或問』にはこの語は見えない。なお『大學或問』中の類似の内容として、以下を挙げることができる。「今且以其至切而近者言之、則心之爲物、實主於身、其體則有仁義禮智之性、其用則有惻隱羞惡恭敬是非之情、渾然在中、隨感而應、各有攸主、而

不可亂也。次而及於身之所具、則有口鼻耳目四肢之用。又次而及於身之所接、則有君臣父子夫婦長幼朋友之常。是皆必有當然之則、而自不容已、所謂理也。外而至於人、則人之理不異於己也。遠而至於物、則物之理不異於人也。極其大、則天地之運、古今之變、不能外也。盡於小、則一塵之微、一息之頃、不能遺也。」本件にまつわる二条が共に楊道夫の記録に出ることから考えるに、或いは楊道夫がこの『大學或問』の趣旨を節略要約したものかとも考えられる(待考)。

(3)「是非人力勉強而至者也」ここでは「貫通」は人力によって至ることのできるものではない、とされているが、これは「秩然有序而不迫切者。」という楊道夫の言葉に対して「然。」と肯定した文脈に立ち、「貫通」を直接的な目標として見据えることを否定しているのであって、朱熹は「貫通」に至ることが人力の結果であることを否定しているのではない。『朱文公文集』卷五七「答陳安卿」に、陳淳の言葉ではあるが、「然欲更進一步、實與夫子相從於卓爾之地、則無所由、蓋前此猶可以用力、此則自大而趨於化、自思勉而之不思勉、介乎二者之境、所未達者一間、非人力之所能爲矣。但當據其所已然、從容涵養、勿忘勿助、至於日深月熟、則亦將忽不期而自到、而非今日之所預知也。不審是否。」とあるのが朱熹の立場に近いものといえよう。

17条

行夫問。明道言致知云、夫人一身之中以至萬物之理、理會得多、自

然有箇覺悟處。

曰。一身之中是仁義禮智、惻隱羞惡、辭遜是非、與夫耳目手足視聽言動、皆所當理會。至若萬物之榮悴與夫動植小大、這底是如何使、那底是如何用、車之可以行陸、舟之可以行水、皆所當理會。

又問。天地之所以高深、鬼神之所以幽顯。

曰。公且說、天是如何獨高。蓋天只是氣、非獨是高。只今人在地上、便只見如此高。要之、他連那地下亦是天。天只管轉來旋去、天大了、故旋得許多渣滓在中間。世間無一箇物事恁地大。故地恁地大、地只是氣之渣滓、故厚而深。

鬼神之幽顯、自今觀之、他是以鬼爲幽、以神爲顯。鬼者、陰也。神者、陽也。氣之屈者謂之鬼、氣之只管恁地來者謂之神。洋洋然如在其上、焄蒿悽愴、此百物之精也、神之著也、這便是那發生之精神。神者是生底、以至長大、故見其顯、便是氣之伸者。今人謂人之死爲鬼、是死後收斂、無形無跡、不可理會、便是那氣之屈底。

道夫問。橫渠所謂二氣之良能、良能便是那會屈伸底否。曰。然。

〔校勘〕

○「行夫問」朝鮮古写本は「夫」を「甫」に作る。

○「自然有箇覺悟處」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。下文並びに同じ。

○「辭遜是非」朝鮮整版本は「辭」を「辭」に作る。

○「天地之所以高深」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「高」

を「高」に作り、呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本は「深」を「澳」に作る。下文並びに同じ。

○「天是如何獨高」成化本、朝鮮古写本は「獨」を「後」に作る。

○「蓋天只是氣」和刻本は「蓋」を「蓋」に作る。

○「他連那地下亦是天」朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。

○「天只管轉來旋去」和刻本は「來」を「來」に作る。下文同じ。

○「故旋得許多渣滓在中間」朝鮮整版本は「旋」を「包」に作り、

成化本、萬曆本、朝鮮整版本は「渣」を「查」に作る。下文同じ。

○「鬼神之幽顯」和刻本は「顯」を「顯」に作る。

○「自今觀之」朝鮮古写本は「觀」を「觀」に作る。

○「陰也」萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「陰」を「陰」に作る。

○「此百物之精也」朝鮮古写本は「物」を「萬」に作る。

○「今人謂人之死爲鬼」萬曆本、和刻本は「爲」を「為」に作る。

○「是死後收斂」成化本、朝鮮古写本、和刻本は「收斂」を「収斂」

に作り、萬曆本は「收斂」に作る。

○「無形無跡」朝鮮古写本は「跡」を「迹」に作る。

○「良能便是那會屈伸底否」萬曆本は「能」を「能」に作る。

〔訳〕

蔡行夫がお尋ねした。「程明道は致知について、「自分自身のことから万物の理に至るまで、取り組んだ対象が多くなれば、おのずからどこかからつと会得する境地が存在するものだ」とおっしゃいましたが（それについてお教えください。）」

お答え。「自分自身のこととしては仁義礼知、惻隱や羞惡、辭讓や是非の心、そして耳目や四肢の視聽に言葉、行動、全て必ず取り組まなくてはならない。万物の榮えては衰えてゆく営みや動植物の大小、これはどのように使うことができるのか、あれはどのように使うことができるのか、車に乗れば陸地をゆくことができ、舟に乗れば河川を渡ることができる、といったことまで、それらについても全て必ず取り組まなくてはならない。」

また（程子の言う）「天地が高くまた深い理由、鬼神がかすかでありまた明らかな理由」についてお尋ねした。

お答え。「君、ちょっと言ってみたまえ。天はどうして高いだけだろうか。私が思うに、天とはとりもなおさず気であり、独り高い、という性質のものではない。ただ、人は今こうして地の上にいるから、それでこのように高い部分だけが見えるわけだ。つまり、あの地の下のものもやはり天なのだ。天はひたすらぐるぐる回っているものだが、天は大きいものだから回っているうちにたくさんのかすがその真ん中に集まってくる。世の中こんなに大きなものなんて天の他にないだろう。だから地というのはこんなに大きいわけだ。地はまさしく気のかすだから、それで分厚くて底深いのだね。」

「鬼神がかすかであり明らか」ということだが、今になって見てみたら、程子は鬼神のうち鬼をかすかなもの、神を明らかなものだとされたのだ。鬼は陰に属し、神は陽に属する。気が縮んだものを鬼と呼び、気がずつとこんな感じでこちらにやって来たものを神と呼ぶ。「のびのびとしていて（祭る人の）上にいるかのようだ」、「香氣が立ち上っ

て嗅ぐ者の心を打つ、これは人の精気だ、神の現れたものだ」というが、これは神が興ってくることの生き生きとしているさまだ。神というのとは生きていたものだから、成長する。それでその明らかな様子を見ることができるのであって、それがつまり気が伸張するものなのだ（神・伸が普通するため）。人々は人が死んだものを鬼と呼ぶが、これは死んだ後には肉体がなくなっていく、痕跡が消え去って認識できなくなる、これがつまり気が屈して縮みゆくものなのだ。」

私道夫がお尋ねした。「張横渠のいう「二気の良能」ですが、その「良能」というのがつまり、縮んだり広がったりすることができるとのことだ、というわけでしょうか？」おっしゃった。「そうだ。」楊道夫録

〔注〕

(1) 「行夫」 「語録姓氏」に「蔡舉録、字行夫、平陽人。」と見える。

(2) 「夫人一身之中以至萬物之理、理會得多、自然有箇覺悟處」 本卷一六条の注に既出。

(3) 「辭遜是非」 「辭遜」は「辭讓」のこと。北宋英宗の実父・濮安懿王の諱・允讓を避けて「讓」を「遜」に改めている。『孟子』「公孫丑」上「無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。」

(4) 「與夫耳目手足視聽言動」 身体の動作にまつわる規範については『禮記』「玉藻」に「足容重、手容恭、目容端、口容止、聲音靜、頭容直、氣容肅、立容德、色容莊。」とあり、九容として重視され

た。また、『論語』「顔淵」に「子曰。非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。」とある。

(5) 「這底是」 この「底」は「箇」に同じ。これは。下の「那底是」の「底」も同じ。

(6) 「車之可以行陸、舟之可以行水」 『語類』卷四、二九条、曾祖道録（I）（二）問。理是人物同得於天者。如物之無情者亦有理否。曰。固是有理。如舟只可行之於水、車只行之於陸。』 『語類』卷一五、三一条、廖德明録「且如作舟以行水、作車以行陸。今試以衆人之力共推一舟於陸、必不能行、方見得舟果不能以行陸也。此之謂實體。」

(7) 「天地之所以高深、鬼神之所以幽顯」 元は二程の語録に見える言葉であり、『大學或問』に於いて朱熹はこれを引いて議論を展開した。『大學或問』「又曰。物必有理、皆所當窮。若天地之所以高深、鬼神之所以幽顯、是也。若曰天吾知其高而已矣、地吾知其深而已矣、鬼神吾知其幽且顯而已矣、則是已然之詞、又何理之可窮哉。また、『河南程氏遺書』卷一五「物理須是要窮。若天地之所以高深、鬼神之所以幽顯。若只言天只是高、地只是深、只是已辭、更有甚。」

(8) 「蓋天只是氣、非獨是高。只今人在地上、便只見如此高」 「天只是氣」という認識は『語類』卷二、一五條、徐寓録（I）（二）「天道左旋、日月星並左旋。星不是貼天。天是陰陽之氣在上面、下人看見、星隨天去耳。」にも見ることができ。この朱熹の天地観念は二程の説を承けたものか。『河南程氏遺書』卷二下「地之下、豈無天。今所謂地者、特於天中一物爾。」この天地観念について、山田慶児氏は関連部分の抄訳を示した上で、「一氣が回転して渣滓を生じ、渣滓

が凝集して地に成る。これが、ほぼ一九〇年ごろ確立された立場であった。」と指摘する(『朱子の自然学』Ⅱ宇宙論・(6) 地の生成と構造(岩波書店、一九七八年、一六一頁)。また、『語類』卷一、二七条、呉振録(一〇)に「天包乎地、天之氣又行乎地之中」とある。なお、朱熹の天地観念は蓋天論ではなく渾天論を基本とした上で張載の独自の宇宙論に強い影響を受けて形成された。蓋天論・渾天論については山田氏前掲書Ⅰ宇宙論前史・(1) 伝統的観念の歴史に図説され、張載らによる宋代宇宙論の展開については(2) 宋学の革命に詳しい。

(9)「他連那地下亦是天」「他連那」は「他那」(あの)の中間に「連」(も)が挿入された形で、「連他那A」(あのAも)と同じかと思われるが、他の用例は見出しがない。「連他那A」に於いて、「他」は具体的な指示対象をもたず、付帯的に用いられる。『西遊記』第四八回「大王穩坐河心、待他脚踪響處、迸裂寒冰、連他那徒弟們一齊墜落水中、一鼓可得也。」

(10)「轉來旋去」「V來V去」は継続的に動作を繰り返すことを表す口語表現。

(11)「鬼者、陰也。神者、陽也」『中庸章句』二六章「子曰。鬼神之爲德、其盛矣乎。」朱注「張子曰。鬼神者、二氣之良能也。愚謂。以二氣言、則鬼者、陰之靈也。神者、陽之靈也。以一氣言、則至而伸者爲神、反而歸者爲鬼、其實一物而已。」

(12)「氣之只管恁地來者謂之神」(ここでは「神」が「來」に対応する概念であることが意識されている。本条注(11)参照。

(13)「洋洋然如其上」『中庸章句』一六章「使天下之人齊明盛服、

以承祭祀、洋洋乎如其上、如其左右。」また、朱注に「孔子曰。其氣發揚于上爲昭明、焄蒿悽愴、此百物之精也。神之著也。正謂此爾。」とあり、本条と同様に「祭義」の文との関連性に注目している。

(14)「焄蒿悽愴、此百物之精也、神之著也」『禮記』「祭義」「衆生必死、死必歸土、此之謂鬼。骨肉斃于下陰爲野土。其氣發揚于上爲昭明。焄蒿悽愴、此百物之精也。神之著也。」鄭玄注「焄謂香臭也。蒿謂氣烝出貌也。上言衆生、此言百物、明其與人同也。不如人貴爾。」

(15)「這便是那發生之精神」「精神」は生き生きとしているさま、力強いさま。許少峰『近代漢語大詞典』「精神」①形容氣盛、勁頭足。『水滸全傳』第六七回…「關勝遙見神火將軍越關越精神、聖水將無半點惧色。」『封神演義』第七二回…「你把吾教門人打死、還到此處來賣精神。」(中華書局、二〇〇八年、九七三頁)

(16)「橫渠所謂二氣之良能」本条注(11)参照。張載の発言の根柢は、『正蒙』「太和」「鬼神者二氣之良能也。」に求められる。

18条

明道云。窮理者、非謂必盡窮天下之理、又非謂止窮得一理便到。但積累多後、自當豁然有悟處。又曰。自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。

今人務博者却要盡窮天下之理、務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我者、皆不是。如一百件事、理會得五六十件了、這三四十件雖未

理會、也大概是如此。

向來某在某處、有訟田者、契數十本、中間一段作偽。自崇寧、政和間、至今不決。將正契及公案藏匿、皆不可考。某只索四畔衆契、比驗前後所斷、情偽更不能逃者。窮理亦只是如此。 淳

〔参考〕

本条はすべて卷一一七、訓門人五、四四條、訓陳淳中に内包される。

『語類』卷一一七、訓門人五、四四條、訓陳淳（Ⅶ 2822, 2823）

程先生曰。窮理者、非謂必盡窮天下之理、又非謂止窮得一理便到。但積累多後、自當脫然有悟處。又曰。自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處。今人務博者却要盡窮天下之理、務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我、此皆不是。且如一百件事、理會得五六十件了、這三四十件雖未理會、也大概可曉了。某在漳州、有訟田者、契數十本、自崇寧起來、事甚難考。其人將正契藏了、更不可理會。某但索四畔衆契比驗、四至昭然。及驗前後所斷、情偽更不能逃。又說。嘗有一官人斷爭田事、被某掇了案、其官人却來那穿款處考出。窮理亦只是如此。

〔校勘〕

○「非謂必盡窮天下之理」 萬曆本、和刻本は「盡」を「畫」に作る。

○「自當豁然有箇覺處」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。下文並びに同じ。

○「今人務博者却要盡窮天下之理」 萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は

「博」を「博」に作り、伝経堂本は「却」を「卻」に作り、和刻本は「盡」を「畫」に作る。

○「也大概是如此」 成化本、萬曆本、呂留良本、伝経堂本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「概」を「槩」に作る。

○「至今不決」 成化本、萬曆本、呂留良本、朝鮮古写本、和刻本は「決」を「決」に作る。

○「將正契及公案藏匿」 萬曆本、和刻本は「藏」を「蔵」に作る。

○「某只索四畔衆契比驗」 伝経堂本は「衆」を「眾」に作る。

○「前後所斷情偽更不能逃者」 朝鮮古写本は「斷」を「断」に作り、萬曆本は「能」を「能」に作る。

○「淳」 伝経堂本は「淳」を「淳」に作る。

〔訳〕

程明道は、「理を窮めるといふのは、必ず天下のあらゆるものの理を窮め尽くすということではないし、また、一つのもの理を窮めるだけでただちに（知至に）到達するということでもない。ただ、積み重ねが多くなっていけば、おのずからどこかからと會得する境地在るまで、取り組んだ対象が多くなれば、おのずからどこかからと會得する境地在るものだ」と言った。また、「自分自身のことから万物の理に至るまで、取り組んだ対象が多くなれば、おのずからどこかからと會得する境地在るものだ」とも言った。

今の世の人々は、博学を志す人は天下のあらゆるものの理を窮め尽くそうなどとし、簡要を志す人は自分の身に振り返って誠実であれば、天下のものうち自身の中にないものなどない、というが、どちらも

正しくない。たとえば百個の物事があって、そのうち五、六十個に取り組んだなら、残ったこの三、四十個はまだ取り組んでいなくとも、おおむねこれこういうことだろう、とわかる。

以前、私がある場所にいた時、田地の境界をめぐるって訴訟を起こす者があったが、証文数十通のうちの一通が偽物だった。崇寧(一一〇二―一一〇六)、政和(一一一一―一一一七)年間からその時に至るまでずっと決着がついていなかった。本物の証文と裁判書類が隠されてしまい、どれも調べるのができなくなっていたのだ。だが、私が当該の田地と境界を接する四方の土地の証文を探し出し、また、関係する判決を比較しただけで、事の真偽はまったくごまかしようがなくなつた。理を窮めるというのも同様にやはりこういうことなのだ。

陳淳録

〔注〕

(1)「明道云。窮理者、非謂必盡窮天下之理、又非謂止窮得一理便到。但積累多後、自當脫然有悟處」『河南程氏遺書』卷二上「所務於窮理者、非道須盡窮了天下萬物之理、又不道是窮得一理便到。只是要積累多後、自然見去。」なお、ここでは程頤の発言ということになっているが、内容から見ると程頤の発言であるように思われる。『語類』本文に於ける「明道」・「伊川」という記述についてはあまり信憑性が高くなく、「明道」と書いていて実際には程頤の発言である場合及びその逆の現象が散見する。

(2)「又曰。自一身之中以至萬物之理、理會得多、自當豁然有箇覺處」

本卷一六条の注に既出。

(3)「務博者」これと下の「務約者」との対比は、『論語』「雍也」「子曰。君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。」を踏まえる。

(4)「務約者又謂反身而誠、則天下之物無不在我者」『孟子』「盡心上」孟子曰。萬物皆備於我矣。反身而誠、樂莫大焉。強恕而行、求仁莫近焉。」また、訓門人篇訳注はこの「務約者」について楊時との関係性を指摘する。「卷一八、一〇七条(II 128)に「龜山説、只反身而誠、便天地萬物之理在我。胡文定却言、物物致察、宛轉歸己。見雲雷、知經綸。見山下出泉、知果行之類。惟伊川言不可只窮一理、亦不能徧窮天下萬物之理。某謂、須有先後緩急、久之亦要窮盡。如正蒙是盡窮萬物之理」とあり、同じく卷六二、四二条(IV 128)に「近世如龜山之論便是如此、以爲反身而誠、則天下萬物之理皆備於我。萬物之理、須你逐一去看、理會過方可。如何會反身而誠了、天下萬物之理、便自然備於我。成箇甚麼」とあることから、これも楊時の場合を参照。『龜山集』卷一八、書三(「答李杭」)「明善在致知、致知在格物。號物之多、至於萬則物將有不可勝窮者。反身而誠、則舉天下之物在我矣。詩曰、天生烝民、有物有則。凡形色具於吾身者、無非物也。而各有則焉。反而求之、則天下之理得矣。由是而通天下之志、類萬物之情、參天地之化、其則不遠矣。」(『朱子語類』訳注 卷百十七〜百十八)九五頁(汲古書院、二〇一四年)

(5)「向來某在某處」卷一一七、四四條、訓陳淳(本条(参考)参照)はこの部分を「某在漳州」に作っており、これが紹熙元(一一九〇)

年四月から翌年四月にかけて朱子が漳州の職にあった時のこととわかる。知漳州時代の朱子が断訟に心を配り、活躍したことは『語類』の他の部分にも示されている。卷一〇六、外任、二七条、葉賀孫録(Ⅶ 2647-2650)「某在漳州、豊憲送下狀如雨、初亦為隨手断幾件。後覺多了、恐被他壓倒了、於是措置幾隻厨子在廳上、分了頭項。送下訟來、即與上簿。合索案底、自入一厨、人案已足底、自入一厨。一日集諸同官、各分幾件去定奪。只於廳兩邊設幙位、令逐項敘來歷、未後擬判。俟食時、即就郡厨辦數味、飲食同坐。食訖、即逐人以所定事較量。初間定得幾箇來、自去做文章、都不說著事情。某不免先爲畫様子云、某官今承受提刑司判下狀係某事。一、甲家於某年某月某日有甚干照、計幾項。乙家於某年某月某日有甚干照、計幾項、逐項次第寫令分明。一、甲家如何因甚麼事爭起到官、乙家如何來解釋互論、甲家又如何供對已前事分明了。一、某年某月某日如何斷。一、某年某月某日某家於某官番訴、某官又如何斷。以後幾經番訴、並畫一寫出、後面却點對以前所斷當否、或有未盡情節、擬斷在後。」田中謙二『朱子語類外任篇訳註』(汲古書院、一九九四年)九五・一一七頁参照。

(6)「契數十本」「契」は「証文」。

(7)「正契及公案藏匿」「正契」は「本物の証文」、「公案」は「裁判書類」。

19条

問。窮理者、非謂必盡窮天下之理、又非謂止窮得一理便到、但積累

多後、自當脱然有悟處。

曰。程先生言語氣象自活、與衆人不同。道夫

〔校勘〕

○「問」朝鮮古写本は「又問」に作る。

〔訳〕

「理を窮めるとは、ぜがひでも天下の理を窮め尽くすのだということではなく、また、ただ一つの理だけを窮めることができればそれでよい、ということでもない。ただ理を窮めることがたくさん積み重なると、自然と脱然と会得する境地が存在するのだ」ということについて質問した。

先生がおっしゃった。「程先生の語気には、その場その場の先生の考えが現れた独特な表現が取られており、常人とは違うのだ。」楊道夫録

〔注〕

(1)「窮理者云々」本卷一八条注(1)参照。

(2)「言語氣象」語気。

(3)「活」生き生きしていること。「活潑澁」は語類に類出。ここでは、固定した表現を取らず、その場の条件に応じた表現が取られること。

『中庸章句』十二章朱注「程子曰。此一節子思喫緊為人處、活潑潑地、讀者其致思焉。」

器遠問。格物當窮究萬物之理令歸一、如何。

曰。事事物物各自有理、如何硬要捏合得。只是才遇一事、即就一事究竟其理、少問多了、自然會貫通。

如一案有許多器用、逐一理會得、少問便自見得都是案上合有底物事。若是要看一件曉未得、又去看一樣、看那箇未了、又看一樣、到後一齊都曉不得。

如人讀書、初未理會得、却不去究心理會、問他易如何、便說中間說話與書甚處相類。問他書如何、便云與詩甚處相類。一齊都沒理會。

所以程子說、所謂窮理者、非欲盡窮天下之理、又非是止窮得一理便到。但積累多後、自當脫然有悟處。此語最親切。 賀孫

〔校勘〕

○「捏合」 朝鮮整版本卷末「考異」「捏一作担、而註曰、音擔、排也。」

○「那箇」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「却」 伝経堂本は「卻」に作る。

○「問他」 朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。以下同じ。

〔訳〕

器遠が質問した。「格物は、万物の理を究め、一つの理に統一させるべきである、というのはどうでしょう。」

先生がおっしゃった。「事事物物にはそれぞれに理がある。それを

どうしてむりやりひとつのものにまとめあげようとするのだ。ただ、なにかちょっとひとつのものと遭遇したらもう、すぐにそのものごとの理を窮めつくし、やがてそれが積み重なれば、自然と貫通することができると。

たとえば机の上にたくさん器物がある場合、一つずつかたづけなければ、しばらくすればおのずとすべて机の上にあるものはそこにあるべきものであることを見て取ることができる。たとえばあることを考えて、それがよくわからないままに、それとは別の似たようなことを考えようとして、それも考えきれぬままに、さらに同じようなことを考えていくと、結局すべてがわからないままになってしまふ。

たとえば人が本を読む場合、全く理解できていないのに、その本に持続的に集中して理解しようとしないう人は、彼に「『易』はどうか」とたずねると、「『易』の中の議論は『書経』のどこそこと似ている」と言うので、そこで彼に「『書経』はどうか」とたずねると、今度は「『詩経』のどこそこと似ている」と答えるのみで、一切がみな理解できぬままなのと同じだ。

だから程子は「いわゆる窮理とは、天下の理を窮め尽くすことではないし、またただ一理を窮めることがきたらそれでよいというものでもない。ただそれを積み重ねていくことが多くなれば、自然と脱然として悟るところがある。」と言うのだ。このことは最もぴったりにくる。」 葉賀孫録

〔注〕

- (1) 「器遠」 曹叔遠、字器遠、瑞安の人。『宋史』卷四一六、『宋元學案』卷五三、『朱子門人』一九四頁。
- (2) 「歸一」 統一、一致させる。『文心雕龍』宗經、致化歸一、分教斯五。」
- (3) 「事事物物、各自有理」 『大学或問』經一章「能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。」
- (4) 「各自」「自」は副詞に添えて二音節にするための文字。
- (5) 「硬」むりやり。
- (6) 「捏合得」こねあげる。もとは粘土で形をつくること。『朱子語類考文解義』「謂不可強令歸一。」「得」は語調を整えるために添えられた文字。
- (7) 「究竟」きわめつくす。通常は副詞だがここでは動詞として用いられている。
- (8) 「少間」しばらくすると、やがて。
- (9) 「理会得」「理会」はもとは「とりくむ」。ここでは。整理する、かたづけの意。「得」は注(6)と同様に語調を整える文字。
- (10) 「器用」道具、用具。各種の儀礼に使うものを特に指すこともあるが、ここでは日常の器物。具体的に朱子の机の上にとんなものがあつたのかについては、『語類』卷一一、四〇条、徐寓録(Ⅰ 18)「因提案上藥囊起曰。如合藥、便要治病、終不成合在此看。如此、於病何補。」同卷九七、二二条、葉賀孫録(Ⅶ 248)「因指案上花瓶云、花瓶便有花瓶底道理。」
- (11) 「去看一樣」「去」は動詞の前について意思を表す意。…しよう

とする。「一樣」は「二件、あるいは一種の意」。以下に引く『滄浪詩話』の荒井健氏の解説(中国文明選『文学論集』、三一九頁、朝日新聞社、一九七二年)参照。『滄浪詩話』詩評「五言絶句、衆唐人是一樣、少陵是一樣、韓退之是一樣、王荊公是一樣、本朝諸公是一樣。」「朱子語類考文解義」は「此乃牽比他文之失。」として、以下の条を参照する。『語類』卷一一八、七六条、甘節録(Ⅶ 287)「理會這箇、且理會這箇、莫引證見、相將都理會不得。理會「剛而塞」、且理會這一箇剛字、莫要理會「沉潜剛克」。各自不同。」「(剛而塞)は『書經』「大禹謨」「沉潜剛克」は同洪範の文。」

(12) 「一齐」一度に、全部。

(13) 「究心」意識をそこに集中して考えること。

(14) 「中間」なか、内部。

(15) 「甚處」どこそこ。不特定の場所を指す。『語類』卷一四、一六一条、楊道夫録(Ⅰ 276)「静而安、便如人既知某物在甚處、某物在甚處、心下恬然無復不安。」

(16) 「親切」びったりくる。『朱子語類』訳注 卷十、十一、二五八頁の注を参照。

21条

問。知至若論極盡處、則聖賢亦未可謂之知至。如孔子不能證夏商之禮、孟子未學諸侯喪禮、與未詳周室班爵之制之類否。

曰。然。如何要一切知得。然知至只是到脱然貫通處、雖未能事事知

得、然理會得已極多。萬一有插生一件差異底事來、也都識得他破。只是貫通、便不知底亦通將去。

某舊來亦如此疑、後來看程子說、格物非謂欲盡窮天下之物、又非謂只窮得一理便到、但積累多後、自脫然有悟處、方理會得。 僞

〔校勘〕

○「挿生」 朝鮮古写本は「生」字無し。

○「他破」 朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。

〔訳〕

質問した。「知至る」について、究極の段階を論ずるなら、聖人といえどもやはり「知至る」とは言えないのではないのでしょうか。たとえば孔子が夏や殷の礼を証拠立てることができなかったこと、孟子が諸侯の喪礼を学んでおらず、周王朝の爵の等級の制度に詳しくなかったなどの類いがそれではないでしょうか。」

先生がおっしゃった。「そうだ。どうしてすべてを知り得ることなど望もうか。しかしながら、「知至る」とは、脱然貫通するところまで到達してさえないれば、すべての事柄を知り得ていなくても、理解できたものは既にきわめてたくさんになっている。だからたとえなにか別の特異な出来事に遭遇しても、やはりみなそれを看破することができるとだ。貫通しさえすれば、知らなかったものについてもまたその理が通じていくのだ。

わたしもかつては君のこの話のような疑問を持っていたが、後に程

子が「格物は天下の理を窮め尽くすことではないし、またただ一理を窮めることができたならそれでよいというものでもない。ただそれを積み重ねていくことが多くなれば、自然と脱然として悟るところがある」と言っているのを読んで、初めて理解することができたのだ。」 沈僞

録

〔注〕

(1)「證夏商之礼」『論語』「八佾」「子曰夏禮吾能言之、杞不足徵也。殷禮吾能言之、宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣。」朱注「徵、證也。」

(2)「未學諸侯喪禮」『孟子』「滕文公」上「諸侯之禮、吾未之學也。雖然吾嘗聞之矣。」

(3)「周室班爵之制」『孟子』「万章」下「北宮錡問曰。周室班爵祿也如之何。孟子曰。其詳不可得聞也。」朱注「班、列也。」

(4)「萬一」 現代日本語の万一同じ。『箋注陶淵明集』卷四「擬古」其六「萬一不合意、永爲世笑之。」

(5)「挿生一件差異底事來」「生一件事」は、なにかことがらが現れること。『語類』卷七二、一七条、陳淳録(V 1815)「問。程子說感應在學者日用言之則何如。曰。只因這一件事、又生出一件事、便是感應與應。因第二件事、又生出第三件事。」「挿」は、ことがらがまぎれこんでくるニュアンス。元無名氏『包待制陳州糶米座劇』楔子「米裏面再挿上些泥土糠秕、則還他箇數兒罷。」「差異底」は、ちがったもの、特異なもの。『語類』卷一三九、五三条、李儒用録(VIII 3309)「歐

公文章及三蘇文好、説只是平易説道理、初不會使差異底字換却那尋常底字。」

(6) 「只是貫通、便不知底亦通將去」「只是…便…」は、…しさえすれば…となる。

(7) 「識得他破」「識破」は「看破する」の意。

(8) 「程子説格物」説の趣旨は第一八条の注(1)所引の程説に同じだが、主語を「格物」とすること、また「天下之理」ではなく「天下之物」とすることは、『大学或問』所引に一致する。『大学或問』「又曰格物非欲盡窮天下之物、但於一事上窮盡、其他可以類推。」

22条

問。程子格物之説。

曰。須合而觀之、所謂不必盡窮天下之物者、如十事已窮得八九、則其一二雖未窮得、將來湊會、都自見得。又如四旁已窮得、中央雖未窮得、畢竟是在中間了、將來貫通、自能見得。程子謂但積累多後、自當脫然有悟處、此語最好。

若以爲一草一木亦皆有理、今日又一窮這草木是如何、明日又一窮這草木是如何、則不勝其繁矣。蓋當時也只是逐人告之如此。 夔孫

〔校勘〕

○「今日」朝鮮古写本は「今日來」に作る。

○「明日」朝鮮古写本は「明日來」に作る。

〔訳〕

程子の格物の説について質問した。

先生がおっしゃった。「これはまとめて考える必要がある。「必ずしも天下の物を極め尽くす必要はない」といわれているのは、たとえ十のことがらについて、既に八九を窮め尽くしていれば、その残りの一二はまだ窮められていなくても、将来それらが集まって、すべて自然とわかるようになる、ということだ。またたとえば、四周が既に窮められていけば、中央はまだ窮められていなくても、結局はその間にあるのだから、いつか貫通して、自然とわかるようになる。程子は、ただ積み重ねていくことが多くなれば、自然と脱然としてわかるところがある、と言っているが、この言葉がもつともよい。

もし、一草一木それぞれにもみな理があるのだから、今日もひとつひとつこの草木がどうなのかを窮め、明日もひとつひとつこの草木がどうなのかを窮めていくのだ、と考えたなら、これは煩雑さにたえられないだろう。思うに程子のその時々々の発言は、ただやはりその場の相手の状態に応じてそのように告げたにすぎないのだ。」

〔注〕

(1) 「問程子格物之説」はつきりとは書かれていないが、続く二三条と同様に、程子の格物についての複数の発言の間に異同があることを質問したものと思われる。『朱子語類考文解義』に「謂程子説有兩説不同、如此段初云天下之物不必盡窮、又云一草一物皆當窮之、其説不同。而各意義今當并聚而觀之、各極其趨偏於一也。」

(2)「合而觀之」いろいろなところをまとめて考える。『語類』卷

九五、一六一條、陳淳録(VI 235)「李問。仁欲以公愛恕三者、合而觀之、如何。曰。公在仁之先、愛恕在仁之後。」

(3)「不必盡窮天下之物者」本卷一八條注(1)を参照。

(4)「如十事已窮得八九」卷一五、二〇〇條、記録者名欠(I 305)「致知格物、十事格得九事通透、一事未通透、不妨。一事只格得九分、一分不透、最不可。」ならびに同條注(3)を参照。

(5)「将来湊會」「湊會」は、集まる、集める。本卷一五條注(3)「湊合」参照。なお、「持ち寄って全てを総合すれば」と解釈することもできる。総合して帰納するイメージ。本卷一五條に「積習既多、自當脫然有貫通處、乃是零零碎碎湊合將來、不知不覺、自然醒悟。」とあるのを参照。

(6)「四旁」四周。『荀子』「大略」「欲近四旁、莫如中央。」『論語精義』卷三下「謝曰。知博而不知約、則失於無統。知約而不知博、則失於無徵。由博而知約、猶知四旁而識中央也。」

(7)「畢竟是在中間了」「畢竟…了」は、結局は…なのだ。「了」は肯定や確定の語氣を表す。『語類』卷六七、一五八條、暖淵録(V 167)「雖是未形、然畢竟是有箇物了。」

(8)「一草一木云々」『河南程氏遺書』卷一五「求之性情、固是切於身。然一草一木皆有理、須是察。」

(9)「逐人告之」「逐人」は人ごとに、相手に応じて。本卷二五條參照。『朱子語類考文解義』「謂各就其所偏而告之。故其言亦不同。」

〔參考〕

本卷七一條、万人傑録

或問程子致知格物之說不同。曰。當時答問各就其人而言之。今須是合就許多不同處、來看作一意為佳。且如既言不必盡窮天下之物、又云一草一木亦皆有理。今若於一草一木上理會、有甚了期。但其間有積習多後、自當脫然有貫通處者、為切當耳。今以十事言之、若理會得七八件、則那兩三件、觸類可通。若四旁都理會得、則中間所未通者、其道理亦是如此。

23條

問。程子言今日格一件、明日格一件、積習既久、自當脫然有貫通處。又言格物非謂盡窮天下之理、但於一事上窮盡其他可以類推。二說如何。曰。既是教類推、不是窮盡一事便了。且如孝、盡得箇孝底道理、故忠可移於君、又須去盡得忠、以至於兄弟、夫婦、朋友、從此推之無不盡窮、始得。

且如炭、又有白底、又有黑底。只窮得黑、不窮得白、亦不得。且如水雖是冷而濕者、然亦有許多樣、只認冷濕一件、也不是格。

但如今下手、且須從近處做去。若幽奧紛拏、却留向後面做。所以先要讀書、理會道理。蓋先學得在這裏、到臨時應事接物、撞著便有用處。且如火爐、理會得一角了、又須都理會得三角、又須都理會得上下四邊、方是物格。若一處不通、便非物格也。

又曰。格物不可只理會文義、須實下工夫格將去、始得。 夔孫

〔校勘〕

- 「其他」 朝鮮整版本は「他」を「佗」に作る。
- 「箇孝」 朝鮮古写本は「个孝」に作る。
- 「只認」 和刻本は「只思」に作る。
- 「却」 伝経堂本は「卻」に作る。
- 「撞著」 成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。
- 「文義」 成化本は「文」を「又」に作る。朝鮮整版本卷末「考異」
「文義、文一誤又」
- 「須實下」 朝鮮古写本は「須便實下」に作る。
- 「夔孫」 朝鮮古写本は「履孫」に作る。

〔訳〕

質問した。「程子は「今日ひとつ格物し、明日ひとつ格物し、それを積み重ねて時間が経てば、自然と脱然として貫通するところがある」と言っています。しかしまた、「格物とは、天下の理を窮めつくすことを言うのではなく、ただ一つの事柄について窮め尽くせば、そのほかのものは類推することができる」とも言っています。この二つの説はどう考えればよいのでしょうか。」

先生がおっしゃった。「類推させると言っているのだから、一事を窮めればそれで終わりというわけではない。たとえば孝について、この孝の道理を窮め尽くすことができるから、その道理を今度は忠として君に移すことができる」とも、さらに忠を窮め尽くさねばな

らない。そしてこれを兄弟、夫婦、朋友に推し進め、そこから推していつて、もうこれ以上窮めるものはない、ということになって、はじめてよいのだ。

たとえば炭で言うと、白い炭があり、黒い炭がある。ただ黒い炭だけ窮めて、白い炭を窮めないなら、やはりそれではいけない。たとえば水で言うと、水は冷たくて湿ったものだが、それでもやはりいろいろな様相を持っているのであって、ただ冷たく湿っているということだけわかっていても、それでは「格」ではないのだ。ただし、いま手をつけようとするときには、身近なところからは始めるべきだ。幽遠なところ、混乱したところなどは、かえって後回しにすればよいのだ。だからまず書物を読み、道理を理解する必要があるのだ。思うに、まずこの書物で学ぶことによって、のちに現実のなかで事物に対応する時に、その道理が有用となる場面があるのだ。

たとえば火鉢のようなもので、一角を理解したら、さらに残りの三つの角もちゃんと理解すべきで、さらに上下四辺のすべてが理解できたら、それではじめて「物格^{いた}る」なのだ。もし一箇所でも通じていないところがあれば、それは「物格^{いた}る」ではないのだ。」

またおっしゃった。「格物とは、ただ格物ということばの意味を理解するだけではだめで、実践のなかで格物していつてこそ、はじめてよいのだ。」 林夔孫録

〔注〕

(1)「今日格一件」云々 本卷七条、注(2)参照。

(2) 「格物非謂」云々 『河南程氏遺書』卷一五「格物窮理、非是要盡窮天下之物。但於一事上窮盡、其他可以類推。至如言孝、其所以為孝者如何、窮理如一事上窮不得、且別窮一事、或先其易者、或先其難者、各隨人深淺。如千蹊萬徑、皆可適國、但得一道入得便可。所以能窮者、只為萬物皆是一理、至如一物一事、雖小皆有是理。」

(3) 「既是教類推」 『四書大全』本の『大学或問』の注が引く本条は「既是教人類推」に作っている。

(4) 「故忠可移於君」 『孝經刊誤』伝十一章「子曰。君子之事親孝、故忠可移於君。」

(5) 「黒炭、白炭」 通常の黒炭と異なり、白炭は高温で焼き、釜の外で白い消粉で消すので白くなる。

(6) 「冷而濕」 水の性質が「冷湿」であることは、『語類』卷六七、一六二条、潘時拳録 (V 1678) 「譬如一淵清水、清冷徹底、看來一如無水相似、他便道此淵只是空底、却不曾將手去探看、自冷而濕、終不知道有水在裏面、此釋氏之見正如此。」を参照。

(7) 「下手、且須從近處做去」 「下手」は、着手する。近いところからはじめなさい、は『語類』卷八、二〇条、周明作録 (I 131) 「學者貪高慕遠、不肯從近處做去、如何理會得大頭項底。」あるいは同卷一五、二三条、楊道夫録 (I 284) 「格物、須是從切己處理會去。」を参照。

(8) 「紛拏」 混乱。「紛拏」に同じ。『楚辭』九思、悼亂「嗟嗟兮悲夫、散亂兮紛拏。」

(9) 「却留向後面做」 「向」は「於」に同じ。

(10) 「撞」 (偶然に) 出会う。『語類』卷二、五条、沈側録 (I 15) 「會時、是日月在黃道赤道十字路頭相交處廝撞着。」卷一五、三六条、林子蒙録 (I 289) 「格物窮理、有一物便有一理。窮得到後、遇事觸物、皆撞著這道理。事君便遇忠、事親便遇孝、居處便恭、執事便敬、與人便忠、以至參前倚衡、無往而不見這箇道理。」

(11) 「火爐」 ひばち。『語類』卷一八、八二条、沈側録 (II 410) 「如一爐火、四人四面同向此火。火固只一般、然四面各不同。若說我只認曉得這是一堆火便了、這便不得。他裏面玲瓏好處無由見。」同卷六二、一四六条、孫自修録 (IV 1517) 「周樸純仁問致中和字。曰。致字是只管挨排去之義。且如此煖閣、人皆以火爐為中、亦是須要去火爐中尋箇至中處、方是當。」

(12) 「理解文義」 讀書を通して格物することを指す、とも解釈できる。
24条

問。伊川論致知處云、若一事上窮不得、且別窮一事。竊謂致之爲言、推而致之以至於盡也。於窮不得處正當努力、豈可遷延逃避、別窮一事邪。至於所謂但得一道而入、則可以類推而通其餘矣、夫專心致志、猶豫其未能盡知、況敢望以其易而通其難者乎。

曰。這是言隨人之量、非曰遷延逃避也。蓋於此處既理會不得、若專一守在這裏、却轉昏了。須著別窮一事、又或可以因此而明彼也。道夫

〔校勘〕

- 「推而致之」 成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「致」を「至」に作る。朝鮮整版本卷末「考異」に「至之、至一作致。」とある。
- 「一事邪」 朝鮮古写本は「邪」を「耶」に作る。
- 「但得一道」 萬曆本、和刻本は「仁得一道」に作る。
- 「致志」 「考異」に「致志、志一作誠。」とある。
- 「盡知」 和刻本は「知」を「如」に作る。
- 「昏了」 成化本、朝鮮古写本は「昏」を「昏」に作る。
- 「須著」 成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

〔訳〕

質問した。「伊川先生は致知を論じて、「もしあるひとつのことから窮められなければ、しばらく別のことがらを窮めるのだ」とされています。わたくし思いますに、「致」の意味は、「推しすすめて、究極の所まで行く」ということです。窮められなかったところでこそ努力すべきであって、どうしてぐずぐず引き延ばして結局それを避けて別のことからを窮めようとしてよいものでしょうか。同じところで言われている「但だ一道を得て入れば、則ち以て類推して其の余に通ずべし」に関して言うなら、「心を専らにして志を致し」てさえ、それでもなお全部知り尽くしていないことを心配するのであって、ましてや簡単なものにとよってそれによって難しいものに通用させようなどと望むことなど許されるのでしょうか。」

先生がおっしゃった。「これは人の力量にあわせて言われているのであって、ぐずぐずして引き延ばして結局それを避けることを言っているのではない。思うに、あるところで理解できなかった場合、もしひたすらそこにとどまって考え続けると、かえってどんどん見えなくなってしまうのだ。その場合は必ず別のことがらを窮めるべきで、そうすれば、そのことがらが明らかになることによって、以前わからなかったものが明らかになることもあるのだ。」 楊道夫録

〔注〕

- (1)「問伊川」云々 『朱子語類考文解義』は「此並下二條皆謂別窮一事、又不可別看他事。」とし、以下の条を参照する。『語類』卷五六、四五条、錢木之録（IV 133）「且理會一處上義理、教通透了、方可別看。如今理會一處未得、却又牽一處來滾同說、少間愈無理會處。聖賢說話各有旨歸、且與他就逐句逐字上理會去。」
- (2)「一事上」云々 本卷二三条注（2）参照。
- (3)「致之為言」 『大学章句』經、朱注「致、推極也。」
- (4)「專心致志、猶慮其未能盡知」 『孟子』「告子」上「今夫弈之為數、小數也、不專心致志、則不得也。」努力を重ねてもなお「未能盡知」であるのではと考えることについては、『語類』卷一七、五九条、楊道夫録（II 88）「如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自修也。既學而猶慮其未至、則復講習討論以求之。」を参照。
- (5)「得一道」云々 本条注（2）参照。なお、現在の『河南程氏遺書』が「得一道入得便可」とするのを『或問』は「得一道入得、便

可類推而通其餘矣」として引いており、本条は『或問』本に一致する。また、「推類以通其餘」がもと『大学章句』の注釈に存在したことについては、『語類』卷一六、三〇条、陳淳録（Ⅱ 320）を参照。

(6) 「正當努力」「正当」は、まさしく…すべき。『資治通鑑』卷一一五「陛下遭堙厄之運、正當努力自強、以壯士民之志、而更為兒女子泣邪。」

(7) 「遷延」ぐずぐずする。『文選』卷一九「登徒子好色賦」「遷延而辭避。」「語類』卷一二九、三四条、黃義剛録（Ⅷ 3092）「富鄭公與韓魏公議不合。富恨之、至不弔魏公喪。富公守某州、魯直為尉、久不之任、在路遷延。富有所聞、大怒、及到、遂不與交割。」

(8) 「須著」必ず…しなければならぬ。

25条

問。程子若一事上窮不得、且別窮一事之說、與中庸弗得弗措相發明否。

曰。看來有一樣底、若弗得弗措、一向思量這箇、少間便會擔閣了。若謂窮一事不得、便掉了別窮一事、又輕忽了、也不得。程子爲見學者有恁地底、不得已說此話。 夔孫

〔校勘〕

○「這箇」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「擔閣」成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「擔」を「檐」に作る。

〔訳〕

質問した。「程子の「一つのこと」がらを窮めることができなかつたら、しばらく別のことがらを窮める」という説は、『中庸』の「得ずんば措かず」とおたがいに明らかにしあうものではないでしょうか。」

先生がおっしゃった。「考えてみれば、確かに同じことを言っているのだ。ただ、「得ずんば措かず」ではあるが、ひたすらひとつのことだけをわからないまま考えつづけてしまうと、しばらくするときとわからないままそれをずる引きずって先に進めなくなってしまう。しかしながら、一つのこと」がらを窮めることができなかつたら、すぐに対象をとりかえて別のことがらを窮めればよい、と言ってしまったら、それはまたいいかげんというものであって、やはりよくない。程子は、学ぶ者がそんなふうであるのを見て取って、やむを得ずこのように語ったのだ。」 林夔孫録

〔注〕

(1) 「弗得弗措」（思索して）その理が得られなければ、得られるまでやめないこと。『中庸章句』二〇章「有弗思、思之弗得弗措也。」「大学或問」「又有以今日格一物明日格一物、為非程子之言者。則諸家所記程子之言、此類非一、不容皆誤。且其為說正中庸學問思辨弗得弗措之事、無所拂於理者。不知何所病而疑之也。」

(2) 「有一樣底」『中庸』も程子も本当に言いたいことは同じであること。なお『朱子語類考文解義』は「謂有如此様人」とし、以下のようなあり方をする人たちがいる、という意に解する。

(3) 「少間」 しばらくすると、やがて。

(4) 「一向」 ひたすら。

(5) 「擔閣」 「擔擱」に同じ。よくない状態をずるずる引きずること。

『語類』卷一〇、三〇条、沈憫録（I 164）「莫要瞻前顧後、思量東西、少間擔閣一生、不知年歲之老。」『朱子語類考文解義』「硬窮不得、終於置之、是為擔閣。」

(6) 「掉」 とりかえる。

(7) 「有恁地底」 『中庸』の「弗得弗措」にとらわれて、一つのことから離れられないことを指す。

(8) 「説此話」 程子の「一つのことがらを窮めることができなかつたら、しばらく別のことがらを窮める」という説を指す。『朱子語類考文解義』は、本卷一二三条を参照するが、それは前条注（1）の錢木之録と同じ内容である。同注参照。

26条

仁甫問。伊川説、若一事窮不得、須別窮一事、與延平之説如何。

曰。這説自有一項難窮底事。如造化・禮樂・度数等事、是卒急難曉、只得且放住。且如所説春秋書元年春王正月、這如何要窮曉得。若使孔子復生、也便未易理會在。須是且就合理會底所在理會。

延平説、是窮理之要。若平常遇事、這一件理會未透、又理會第二件、第二件理會未得、又理會第三件。恁地終身不長進。 賀孫

〔校勘〕

○「與延平之説如何」「延平之説」を朝鮮古写本は「延平李先生説」に作る

○「須是且就合理會底所在理會」 諸本は呂留良本も含めて「底」を「易」に作り、伝経堂本のみ「底」に作る。賀瑞麟「朱子語類正譌」

「理會圖 原作易、據周本改。」

〔訳〕

仁甫（徐容）がお尋ねした。「伊川（程頤）は「格物窮理に際して」もしも一つの事柄について窮めることができなかつた場合、別の事柄について窮めるようにすべきだ。」と説いていますが、この説は延平（李侗）の説（一つの事柄を窮め尽くしてから、別の事柄に取りかかれとの説）と比較してみても、如何でしょうか。

先生「これは、窮めることが難しい事柄も当然有る、ということを書いたものだ。造化の営み、礼楽の制度、度数（天体や器物などに關する計測値）等の事柄は、にわかには明らかにし難いものであるから、とりあえずは棚上げしておく他はない。例えばあの『春秋』に記された「元年春王正月」など、こんなものはどうして窮め明らかにする必要が有ろう。仮に孔子が（今の世に）再び生まれ出たとしても、やはりすぐには理解し難いことであろう。（こういう場合には）差しあたり、理解すべき別の事柄の所在に即して理解するようにすべきなのだ。

延平が説いているのは、（より一般的な）窮理の要点だ。平素、何らかの事柄に直面した際、この一件の事柄に対する理解がまだ透徹し

でもないのに、更に第二件を理解しようとし、その第二件がまだ理解できてもないのに、更に第三件を理解しようとする。そんなことでは一生、進歩はないのだ。」葉賀孫録

〔注〕

(1) 「仁甫問」「仁甫」は徐容、字仁父。『朱子語録姓氏』所載。

(2) 「伊川説、若一事窮不得、須別窮一事」『河南程氏遺書』卷一五「格物窮理、非是要盡窮天下之物。但於一事上窮盡、其他可以類推。

至如言孝、其所以為孝者、如何。窮理（一無此二字）如一事上窮不得、且別窮一事。或先其易者、或先其難者、各隨人深淺。如千蹊萬徑、皆可適國。但得一道入得、便可。所以能窮者、只為萬物皆是一理。至如一物一事雖小、皆有是理。」この語は『大学或問』にも引かれている。但し文言に若干の異同がある。『大学或問』又曰。格物非欲盡窮天下之物。但於一事上窮盡、其他可以類推。至於言孝、則當求其所以為孝者如何。若一事上窮不得、且別窮一事。或先其易者、或先其難者、各隨人深淺。譬如千蹊萬徑、皆可以適國。但得一道而入、則可以推類而通其餘矣。蓋萬物各具一理而萬理同出一原、此所以可推而無不通也。」

(3) 「與延平之説如何」延平は李侗（一〇九三～一一六三）の号。李侗は朱熹の早期の師。李侗の語は『大学或問』所引に見える。『大学或問』「問獨惟念、昔聞延平先生之教、以為為學之初、且當常存此心、勿為他事所勝。凡遇一事、即當且就此事反復推尋、以究其理、待此一事融釋脫落、然後循序少進而別窮一事。如此既久、積累之多、

胸中自當有洒然處、非文字言語之所及也。詳味此言、雖其規模之大、條理之密、若不逮於程子、然其工夫之漸次、意味之深切、則有非他説所能及者。惟嘗實用力於此者為能有以識之、未易以口舌爭也。」但し李侗のこの語は『延平答問』には未見。なお『大学或問』の内容に關連する条を『語類』から引いておく。『語類』卷一八、一二三条、李壯祖録（II 422）「李堯卿問。延平言窮理工夫、先生以為不若伊川規模之大、條理之密。莫是延平教人窮此一事、必待其融釋脫落、然後別窮一事、設若此事未窮、遂為此事所拘、不若程子若窮此事未得、且別窮之言為大否。曰。程子之言誠善。窮一事未透、又便別窮一事亦不得。彼謂有甚不通者、不得已而如此耳。不可便執此説、容易改換、却致工夫不專一也。」

(4) 「禮樂度數」礼楽の制度や天体器物等の計測値。同様の用例を挙げておく。『語類』卷一三七、一七条、沈僩録（VIII 3255～3256）「殊不知孔子之時、接乎三代、有許多典謨訓誥之文、有許多禮樂法度名物度數、數聖人之典章皆在。」

(5) 「卒急難曉」「卒急」は倉卒に、にわかに。

(6) 「只得且放住」「只得」は、…するしかない。「且」は、しばらく、さしあたり。「放」は、置く。「住」は動詞の後について不動性を表す。ここでの「放住」は、棚上げする、ペンディングする、捨て置く。

(7) 「且如所説」「且如」は例えば。「所説」は、所謂、例の、あの。

(8) 「春秋書元年春王正月」春秋十二公のうち、六月に即位した定公を除く十一公の経文は、全て「元年春王正月」で書き出されている。『春秋左氏伝』隱公元年、経「元年春王正月」杜預注「隱公之

始年、周王之正月也。凡人君即位、欲其體元以居正、故不言一年一月也」同、定公元年、經「元年春王」杜預注「公之始年而不書正月、公即位六月故。」ここで朱熹が「元年春王正月」を難解とするのは、『春秋』經文にいう正月が、夏正（建寅一月為正）・殷正（建丑十二月為正）・周正（建子十一月為正）の所謂三正のうち夏正か周正かという問題を含んでいたからである。例えば胡安国（一〇七四—一一三八）の『胡氏春秋伝』はこれを夏正とするが、朱熹は判断を保留している如くである。『胡氏春秋伝』隱公「元年春王正月」注「乃以夏時冠周月、何哉。聖人語顔回以為邦、則曰、行夏之時。作春秋以經世、則曰、春王正月。此見諸行事之驗也。…以夏時冠月、垂法後世、以周正紀事、示無其位、不敢自專也。其旨微矣。」『語類』卷八三、五六条、陳淳録（VI 2138）問。春王正月、是用周正、用夏正。曰。兩邊都有證據、將何從。（原注「義剛録云。這箇難稽考、莫去理會這箇。」）某向來只管理會此、不放下、竟擔閣了。吾友讀書不多、不見得此等處。」なお胡安国説に対する朱熹の見解等に関しては『朱文公文集』卷四三「答林擇之」第一二書（「所論大抵皆得之」云々）を参照。

(9)「若使孔子復生」「若使」は仮定を表す。もし、仮に。「孔子復生」について、類似的表現を挙げておく。『孟子』「公孫丑」上「聖人復起、必從吾言矣。」「孟子」「滕文公」下「聖人復起、不易吾言矣。」「語類」卷一一四、一四條、訓葉賀孫（VII 2757）「某嘗謂、雖使聖人復生、亦只將六經語孟之所載者、循而行之、必不更有所作為。」なお、ここで孔子の名が持ち出されるのは言うまでもなく、孔子を『春秋』の

編纂者だとする伝承を踏まえてのことである。『孟子』「滕文公」下「世衰道微、邪說暴行有作。臣弑其君者有之、子弑其父者有之。孔子懼、作春秋。」

(10)「也便未易理會在」「也」は、やはり。「便」は、すぐに、直ちに。「理會」は、取り組む、理解する。ここでは後者の意。「在」は句末の助字、断定の意を表す。

(11)「須是且就合理會底所在理會」校勘でも触れた通り、諸本は「底」を「易」に作る。因みに呂留良本は「須是且就合理會。易所在理會。」のように句読を切っている。また『朱子語類考文解義』は「易所在易曉之處、須先理會。」との注釈を施している。これらを参照の上、諸本に従って当該箇所を訳せば、「差しあたり、理解すべき所に即して理解し、理解しやすい所から理解するようにすべきだ。」との意になろう。但しここでは伝経堂本及び底本のテキストに従って訳出した。

(12)「恁地終身不長進」「恁地」は、このように。「長進」は、進歩。

27条

陶安國問。千蹊萬徑、皆可適國。國、恐是譬理之一源處。不知從一事上便可窮得到一源處否。

曰。也未解便如此。只要以類而推。理固是一理。然其間曲折甚多。須是把這箇做樣子、却從這裏推去始得。

且如事親、固當盡其事之道。若得於親時是如何、不得於親時又當

如何。以此而推之於事君、則知得於君時是如何、不得於君時又當如何。推以事長、亦是如此。自此推去、莫不皆然。 時舉

〔校勘〕

○「千蹊萬徑」 萬曆本、和刻本は「徑」を「徑」に作る。

○「恐是警理之一源處」 和刻本は「源」を「原」に作る。

○「皆可適國恐是警理之一源處」 万曆本、和刻本は二文字目の「國」を「い」に作る

○「也未解便如此」 萬曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

○「須是把這箇做樣子」 朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

〔訳〕

陶安國がお尋ねした。「伊川の語の」「千の蹊も万の徑も、（最終的には）そのどれも国にたどり着けるのだ。」という場合の「国」とは、理の源のところを喩えたものかと思われます。けれども、ただ一つの事柄に即するだけで、それでもう一源のところまで窮め至ることなど、果たしてできるものなのでしょうか。」

先生「やはり、にわかにならないうまにいきつくことはできないだろう。ただ、類推してみることが肝要だ。理は、もとより（同じ）一つの理に他ならない。しかしそこに含まれる具体的詳細は、極めて多岐にわたる。それ故に是非とも、（まずは）この一つの事柄に即して（その理を）規準にし、その上でそこから（他の事柄へと）類推していく、というようであつてこそよいのだ。」

例えば親にお事える場合、もちろん親にお事える道を尽くすべきだ。親の意に適っている時にはどうか、親の意に適わなかった時にはどうすべきなのか。ここからそれを主君にお事える場合にまで類推していけば、主君の意に適っている時にはどうか、主君の意に適わなかった時にはどうすべきかも、わかるようになる。年長者にお事える場合にまで類推してみても、同様である。ここから更に他に類推していけば、一つとして同様でないものはない。」 潘時拳録

〔注〕

(1)「陶安國」諱・本貫とも未詳。『朱子門人』二二六頁は、『語類』における門人の記載は全て字が用いられることから、安國は字であろうと推定する。また『朱門弟子師事年攷』二八四頁には、長沙期における師事が想定されるとある。『語類』卷一六、二二二条、董録に既出。

(2)「千蹊萬徑、皆可適國」『河南程氏遺書』卷一五、及び『大学或問』。前条に既出。前条注参照。ここでの「國」は、国都の意。『朱子語類考文解義』「國謂國都。」范仲淹『范文正集』卷七「岳陽樓記」「登斯樓也、則有去國懷鄉、憂讒畏譏、滿目蕭然、感極而悲者矣。」

(3)「恐是警理之一源處」『大学或問』「譬如千蹊萬徑、皆可以適國。但得一道而入、則可以推類而通其餘矣。蓋萬物各具一理而萬理同出一原、此所以可推而無不通也。」「理之一源」に関しては、以下も参照のこと。『語類』卷二七、五六条、周明作録（II 86）「先生問坐問學者云。吾道一以貫之、如何是曾子但未知體之一處。…這一箇道理、

從頭貫將去。如一流之水、流出為千條萬派、不可謂下流者不是此一流之水。」『語類』卷四一、二二条、潘植録(Ⅲ 1049)「禮儀三百威儀三千、却只是這箇道理。千條萬緒、貫通來、只是一箇道理。夫子所以說吾道一以貫之、曾子曰、忠恕而已矣、是也。蓋為道理出來處、只是一源、散見事物、都是一箇物事做出底。」

(4)「不知從一事上便可窮得到一源處否」「不知…否」は、果たして…なのであろうか。「便」は、すぐに、直ちに。「窮得到一源處」は、一源の所にまで窮め至れる。「得到」は動詞の後ろについて、その動作がある位置や程度・目的(物)に到達し得ることを表す。

(5)「也未解便如此」「也」は、やはり。「解」は、できる。「便」は、すぐに、直ちに。

(6)「只要以類而推」「只要」は、ただ…することが肝要だ。「以類而推」は、類推する。『河南程氏遺書』卷一五「格物窮理、非是要盡窮天下之物。但於一事上窮盡、其他可以類推至。」

(7)「理固是一理、然其間曲折甚多」理はあくまでも一理だが、その具体的な現れ方は極めて多様である、との意。次条の「理皆同出一原。但所居之位不同、則其理之用不一」も同趣旨。「其間」は、そこ。「曲折」は、細々とした事柄、細部、具体的詳細。『語類』卷一四、一五七条、胡泳録「如平時知得為子當孝、為臣當忠、到事親事君時、則能思慮其曲折精微而得所止矣。」『語類』卷一五、一三八条、周明作録「又問。大學表裏精粗如何。曰。自是如此。粗是大綱、精是裏面曲折處。」

(8)「須是把這箇做樣子、却從這裏推去始得」「須是…始得」は、是

非とも…して、それでこそよい。「様子」は、手本、規準、範型。「做樣子」は、手本にする、規準にする。『語類』卷九、五五条、葉賀孫録(Ⅰ 156-157)「這便著將前聖所說道理、所做樣子、看教心下是非分明。」『語類』卷九〇、一〇四條、葉賀孫録(Ⅵ 2316)「如今要知宗法祭祀之禮、須是在上之人、先就宗室及世族家行了做箇樣子、方可使以下士大夫行之。」なお、時代は下るが以下の用例も参照。ここでは「做樣子」が「學」「做做」とほぼ同義で用いられている。元、許衡(号魯齋、二〇九〜二二八)『魯齋遺書』卷二「語録」下「學仙長年一說、世所決無、決不可得。世間萬事、有樣子可做。只此無樣子。古仙者不可見、長年者亦無有看、誰做樣子。今富貴者、見有樣子、其所以取富貴者、又皆可學可做做。然終身盡智力、有不可得。況做幸無可做做者乎。」

(9)「若得於親時是如何、不得於親時又當如何」「得於親」は、親の意にかなう。「不得於親」は、親の意に悖る。『呂氏春秋』有始覽「務本」「故論人無以其所未得而用其所已得、可以知其所未得矣。」高誘注「以其孝得於親、則知必忠於君也。」

(10)「不得於君」主君の眷顧信任が得られない。『孟子』萬章「上」人少則慕父母、知好色則慕少艾、有妻子則慕妻子、仕則慕君、不得於君則熱中。」朱注「少好皆去聲。艾、美好也。…不得、失意也。熱中、躁急心熱也。」

徳元問。萬物各具一理、而萬理同出一原。

曰。萬物皆有此理、理皆同出一原。但所居之位不同、則其理之用不一。如為君須仁、為臣須敬、為子須孝、為父須慈。物物各具此理、而物物各異其用、然莫非一理之流行也。

聖人所以窮理盡性而至於命、凡世間所有之物、莫不窮極其理、所以處置得物物各得其所、無一事一物不得其宜。除是無此物、方無此理。既有此物、聖人無有不盡其理者。所謂惟至誠贊天地之化育、則可與天地參者也 個

〔校勘〕

- 「曰萬物皆有此理理皆同出一原」朝鮮古写本は「皆有」を双行小字に作る。萬曆本、和刻本は二文字目の「理」を「り」に作る。
- 「物物各具此理」万曆本、和刻本は二文字目の「物」を「ぶ」に作る。因みに直後の「而物物各異其用」の「物物」は、両本とも底本に同じ。
- 「所以處置得物物各得其所」万曆本、和刻本は二文字目の「物」を「ぶ」に作る。

〔訳〕

徳元（郭友仁）が「万物はその各々が一理を具えながら、しかもそれらの万理はともに一つの源から出たものである。」（『大学或問』）についてお尋ねした。

先生「万物はその全てがこの理を具え、しかもその理は全て一つの源から出たものだ。ただ、理の占めている場（≡理を具有する個物）が異なるから、それぞれの理の現れ方も一樣ではないのだ。例えば君としては仁であるべく、臣としては敬であるべく、子としては孝であるべく、父としては慈であるべし、というようなものだ。一物一物はそれぞれこの理を具え、一物一物はそれぞれその理の現れ方を異にするが、しかもそれらは全て（同じ）一理の流行あはれに他ならない。

聖人が「理を窮め性を尽くして命に至る」（『周易』「説卦伝」）ことができるのも、世間に存在するありとあらゆる事物に即して、その理を極限まで窮め尽くさないことにはないからなのであって、それ故に一物一物に対する処理がそれぞれにその所を得て、一事一物の全てにおいて必ずその妥当性を得ることができるのだ。ただこの物がない場合にも、この理もないのだ（≡物がある限り、そこには必ず理もある）。そしてこの物が有る以上、聖人はその理を尽くさないことはない。これが所謂「ただ至誠にしてはじめて、天地の化育を翼賛し得るから、天地とともに（天地人の）三者の一画を占めることができる。」（『中庸章句』二二章）ということだ。」 沈憫録

〔注〕

- (1) 「徳元問」郭友仁、字徳元。『朱子語録姓氏』所収。
- (2) 「萬物各具一理、而萬理同出一原」『大学或問』「譬如千蹊萬徑、皆可以適國。但得一道而入、則可以推類而通其餘矣。蓋萬物各具一理而萬理同出一原、此所以可推而無不通也。」本卷二六条注(2)

に既引。

- (3) 「所居之位不同、則其理之用不一」「所居之位」とは、理が占める場の位相。理は氣(≡物)とともにあるから、理を具有する物の多様性に応じて、理の現れ方も多様である。「理之用」の「用」は「体」の対概念。ここでは、朱子学の術語である「理一分殊」や本条後出の「流行」等も合わせて、諸概念を以下のように整理しておきたい。
- 「体——一原——理一——理」「用——流行——分殊——万理」この場合、「理一」「一理」(体)とは、氣の要素を捨象された理。「分殊」「万理」(用)とは、氣とともにある(≡個物に具有された)理。『語類』卷二七、四一条、董銖録(Ⅱ 677~678)「或問理一分殊。曰。…若曾子元不曾理會得萬殊之理、則所謂一貫者、貫箇什麼。蓋曾子知萬事各有一理、而未知萬理本乎一理。故聖人指以語之。曾子是以言下有得、發出忠恕二字、太煞分明。」また以下の用例に見られる語彙を援用して説明すれば、「一理≡天下公共之理」「万理≡一物所具之理」という関係になるだろう。『語類』卷九四、三一条、廖德明録(Ⅶ 333)「問。未有一物之時、如何。曰。是有天下公共之理、未有一物所具之理。」
- (4) 「如為君須仁、為臣須敬、為子須孝、為父須慈」『大学章句』伝三章「為人君止於仁、為人臣止於敬、為人子止於孝、為人父止於慈、與國人交止於信。」ここでは、一源としての理が、その理を具有する物(君臣父子)の相違に依じて仁敬孝慈として現れるという例を挙げることで、一理と万理、一源と流行の関係が説明されている。
- (5) 「莫非一理之流行也」「流行」は、ここでは「一理」「一原」(一

- 源)と対を為している。理は根源において一つだが(一理、一源)、個物に具有された理としての現れ方(流行)は多岐多様である、との趣旨(所謂「理一分殊」)を、川の水源と下流支流のイメージと重ね合わせて表現したもの。『語類』卷二七、五六条、周明作録(Ⅱ 333)「先生問坐問學者云。吾道一以貫之、如何是曾子但未知體之一處。…他見聖人用處、皆能隨事精察力行。不過但見聖人之用不同而不知實皆此理流行之妙。且如事君忠是此理、事親孝也是此理、交朋友也是此理、以至精粗小大之事、皆此一理貫通之。聖人恐曾子以為許多般樣、故告之曰、吾道一以貫之。…這一箇道理、從頭貫將去。如一源之水、流出為千條萬派、不可謂下流者不是此一源之水。」
- (6) 「窮理盡性而至於命」『周易』「說卦伝」「窮理盡性以至於命。」
- (7) 「各得其所」『周易』「繫辭下傳」「包犧氏沒、神農氏作。…日中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、蓋取諸噬嗑。」『論語』「子罕」「子曰。吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。」
- (8) 「一事一物不得其宜」「得其宜」は、妥当性を得る。『礼記』「樂記」「此所以祭先王之廟也、所以獻酬酢也、所以官序貴賤各得其宜也。」
- (9) 「除是無此物、方無此理」この物がない場合にのみ、この理もない。物がある限り、そこには必ず理がある(例えば『語類』卷一五、三二条、甘節録「有物便有理」)、との意。「除是」は、ただ…だけが。「除是…方…」は、ただ…の場合にのみ…である。『語類』卷三三、七一条、徐寓録(Ⅲ 855)「除是聖人、方做得。然堯舜猶病。」『語類』卷三六、九四条、徐寓録(Ⅲ 969)「此處、除是顏子方見得。」
- (10) 「所謂惟至誠贊天地之化育、則可與天地參者也」『中庸章句』

二二章「唯天下至誠為能盡其性、能盡其性則能盡人之性、能盡人之性則能盡物之性、能盡物之性則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。」

29条

行夫問。萬物各具一理、而萬理同出一源、此所以可推而無不通也。曰。近而一身之中、遠而八荒之外、微而一草一木之衆、莫不各具此理。如此四人在坐、各有這箇道理。某不用假借於公、公不用求於某、仲思與廷秀亦不用自相假借。然雖各自有一箇理、又却同出於一箇理爾。如排數器水相似。這盂也是這樣水、那盂也是這樣水、各各滿足、不待求假於外。然打破放棄、却也只是箇水。此所以可推而無不通也。所以謂格得多後自能貫通者、只為是一理。釋氏云。一月普現一切水、一切水月一月攝。這是那釋氏也窺見得這些道理。濂溪通書只是說這一事。道夫

〔校勘〕

○「如此四人在坐、各有這箇道理」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。

○「某不用假借於公公不用求於某」萬曆本、和刻本は二文字目の「公」を「己」に作る。

○「這是那釋氏也窺見得這些道理」朝鮮古写本は「這些道理」を「他這些道理」に作る。

〔訳〕

行夫（蔡懸）が「万物はその各々が一理を具えながら、しかもそれらの万理はともに一つの源から出たものである。それ故に（一事から他事へと）類推しても、必ず（その理に）通じることができるのだ。」（『大学或問』）についてお尋ねした。

先生「近くは一身の中から、遠くは八荒（八方の荒涼僻遠の地）の外に至るまで、小にしては一草一木の多きに至るまで、その各々が全て、この理を具えている。

今ここにこうして我々四人が着座しているが、その各々がこの道理を具えている。（その道理は）私が君（蔡懸）から借りるまでもなければ、君が私に求めるまでもなく、また仲思（楊道夫）と廷秀（陳芝）もやはり、互いに相手から借りるまでもない。各自がそれぞれの理を具えているながら、しかもそれらはいずれも一つの理から出たものに他ならないのだ。

ちょうど数個の器に入った水を並べたようなものだ。この盂（う）（鉢）の中身もこんな水だし、あの盂の中身もこんな水で、それぞれが水で満たされていて、外に求め借りるまでもない。けれども（それらの盂を）割って一箇所に注いでしまえば、それはやはり同じ水に他ならない。これが「（一事から他事へと）類推しても、必ず（その理に）通じることができる所以なのだ。」格物する件数が多ければ、自ずと（全ての理に）貫通することができる」というのも、（その全ての理が）一理だからに他ならない。

釈氏は云う。「一つの月はあらゆる水面にあまねくその姿を映し出

し、あらゆる水面の月は一つの月に包摂される。」この語からすれば、かの釈氏もこうした道理を窺い知っていたわけだ。濂溪（周敦頤）の『通書』も、この一事を説いたものに他ならない。」楊道夫録

〔注〕

(1) 「行夫問」蔡懋、字行夫。『朱子語録姓氏』所収、壬子（一一九二）所録。

(2) 「萬物各具一理、而萬理同出一源、此所以可推而無不通也」『大學或問』「蓋萬物各具一理而萬理同出一原、此所以可推而無不通也。」

(3) 「遠而八荒之外」「八荒」は、八方の荒涼僻遠の地。『漢書』卷三一「項籍」贊「贊曰。昔賈生之過秦曰。秦孝公據殽函之固、擁雍州之地、君臣固守而闔周室、有席卷天下、包舉宇內、囊括四海、并吞八荒之心。」注「張晏曰。括、結囊也、言其能包含天下。師古曰。八荒、八方荒忽極遠之地也。」賈誼「新書」「過秦」上、及び『史記』卷四八「陳涉世家」にもほぼ同文有り。

(4) 「微而一草一木之衆、莫不各具此理」『河南程氏遺書』卷一八「一草一木皆有理、須察。」

(5) 「如此四人在坐」ここにいう「四人」は、蔡懋（字行夫）、楊道夫（字仲思）、陳芝（字廷秀）、及び朱熹を指す。『朱門弟子師事年攷』一二八頁（蔡懋、陳芝）及び一三三頁（楊道夫）において推定されている。三者の師事期が重なるのは紹熙三年壬子一一九二（朱熹六十三歳）のみなので、本条は同年の所録と見なし得る。

(6) 「某不用假借於公」「不用」は、…する必要がない、…するまで

もない。「公」は二人称。君。この語は行夫（蔡懋）の質問に答えたものであるから、ここでの「公」は蔡懋を指す。なお『語類』において朱熹が門人に対して用いる二人称としては「公」「諸公」「吾友」「你」等が有る。

(7) 「仲思與廷秀」「仲思」は、楊道夫、字仲思、仲思。『朱子語録姓氏』所収、己酉（一一八九）以後所聞。「廷秀」は、陳芝、字廷秀（庭秀）。『朱子語録姓氏』所収、壬子（一一九二）所聞。

(8) 「亦不用自相假借」「自相」は、互いに。『漢語大詞典』「自相、相互。」あるが。『漢語大詞典』「然雖、雖然。」「却」は、話者の予想や通常の道理に反する、という語氣を表す。かえって、その実。

(10) 「如排數器水相似」「如：相似」は、…のようなものである。「排」は、排列する、並べる。

(11) 「然打破放裏」「放裏」は「放裏面」と同じで、中に置く、中に入れる、中に注ぐ、放り込む。『語類』卷一五、一一〇条、林夔孫録「二者為是真底物事、却著些假攙放裏、便成詐偽。」「語類」卷一九、九七条、葉賀孫録（II 44）「今人不會讀書是如何。只緣不會求聖人之意、纔拈得些小、便把自意硬入放裏面、胡說亂說。」

(12) 「所以謂格得多後自能貫通者」『河南程氏遺書』卷一八「須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」

(13) 「釋氏云。一月普現一切水、一切水月一月攝」永嘉玄覺（六六五〜七一三）「證道歌」（大正、四八冊、三九六頁）「一性圓通一切性、一法遍含一切法。一月普現一切水、一切水月一月攝。諸佛法身入我

性、我性同共來合。』『信心銘・証道歌・十牛圖・坐禪儀』六五、

六六頁（禪の語録16、筑摩書房、一九八三年）。なお時代は降るが

明の曹端（号月川、一三七六—一四三四）にも同様の語がある。『曹

月川集』（不分卷）詩「月川交輝圖」「天月一輪映萬川、萬川各有月

團圓。有時川竭為平地、依舊一輪月在天。」

（14）「那釋氏也窺見得這些道理」「這些」は、このような。

（15）「濂溪通書只是說這一事」濂溪は周敦頤（一〇一七—一〇七三）

の号。「只是」は、ただ…だけだ、…に他ならない。ここでの「這

一事」とは、一が多に分有され多が一に包摂される、という観点を

指す。『通書』中から関連する条を拾っておく。『通書』「動靜」第

一六章「水陰根陽、火陽根陰、五行陰陽、陰陽太極。」「理性命」第

二二章「二氣五行、化生萬物。五殊二實、二本則一。是萬為一、一

實萬分、萬一各正、小大有定。」注「二氣五行、天之所以賦受萬物

而生之者也。自其末以緣本、則五行之異、本二氣之實、二氣之實、

又本一理之極。是合萬物而言之為一太極而已也。自其本而之末、則

一理之實而萬物分之以為體、故萬物之中各有一太極、而小大之物莫

不各有一定之分也。此章與十六章意同。」なおこのような観点は同

じく周敦頤の『太極圖説』においてより詳細に述べられている。「無

極而太極、太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰。…陽變陰合而生水

火木金土。…五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也。』『通書

と『太極圖説』の関係について、朱熹は以下のように述べている。『語

類』卷九四、一一四條、黃營録（VI 2389）「通書一部、皆是解太極説。

這道理、自一而二、二而五。」

30 条

或問。萬物各具一理、萬理同出一原。

曰。一箇一般道理、只是一箇道理。恰如天上下雨。大窩窟便有

窟水、小窩窟便有小窩窟水、木上便有木上水、草上便有草上水、隨處

各別、只是一般水。 胡泳

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一八は本条を収録しない。

〔訳〕

ある者が「万物はその各々が一理を具えながら、しかもそれらの万

理はともに一つの源から出たものである。」（『大学或問』）についてお

尋ねた。

先生（万物の）一個一個がそれぞれに一種の道理を具えながら、（し

かもその全ては同じ）一個の道理に他ならないのだ。ちょうど空から

雨が降る場合のようなものだ。大きな窪みには大きな窪みの水が、小

さな窪みには小さな窪みの水が、木の上には木の上の水が、草の上

は草の上の水が、それぞれの場所にに応じてそれぞれ別個に存在しなが

ら、しかも（それらの全ては）同じ水に他ならないのだ。」 胡泳録

〔注〕

（1）「萬物各具一理、萬理同出一原」『大学或問』「蓋萬物各具一理

而萬理同出一原。」

(2) 「一箇一般道理、只是一箇道理」「一箇一般道理」は「萬物各具

一理」と、「只是一箇道理」は「萬理同出一原」と、それぞれ対応する。

「一般」は、同じ、一種の意。ここでは一種の意。「一箇一般道理」は、

(万物の) 一箇一箇がそれぞれに一種の道理を具えている、との意。

(3) 「恰如天上下雨」「恰如」は、あたかも…のようである。「天上」

は、天、空。「下雨」は、雨が降る。

(4) 「大窩窟便有大窩窟水」「窩窟」は、窪み、穴。

(5) 「只是一般水」ここでの「一般」は、同様の、同じ、の意。

(6) 「胡泳」「語類」の記録者名は通常は諱のみで記されるが、泳と

いう諱を持つ記録者には胡泳と湯泳の二名がいるので、両者を区別

するために胡泳の場合のみフルネームで記載される。三浦國雄『朱

子語類』抄』九五頁。

31条

又問。物必有理、皆所當窮云云。

曰。此處是緊切。學者須當知夫天如何而能高、地如何而能厚、鬼神如何而為幽顯、山岳如何而能融結、這方は格物。道夫

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一八は本条を収録しない。

○「皆所當窮云云」朝鮮整版本は「云云」を双行小字に作る。

〔訳〕

また「物には必ず理が有るから、それらの全てを窮めるべきだ。」云々(程頤の語)についてお尋ねした。

先生「ここは重要で切実なところだ。学ぶ者は是非、あの天はどうして高くあり得るのか、地はどうして厚くあり得るのか、鬼と神とはそれぞれどうして幽かであり顕らかであるのか、山岳はどうして融けて集まることができるのかを知るべきなのであって、それでこそ格物だ。」楊道夫録

〔注〕

(1) 「物必有理、皆所當窮云云」「大学或問」「又曰。物必有理、皆所當窮。若天地之所以高深、鬼神之所以幽顯、是也。若曰天吾知其高而已矣、地吾知其深而已矣、鬼神吾知其幽且顯而已矣、則是已然

之詞、又何理之可窮哉。」「大学或問」の当該箇所は程子の語を列記する文脈であり、「又曰」も程子語の引用。但し以下の程頤の語と

「大学或問」所引との間には若干の異同がある。『河南程氏遺書』卷

一五「物理須是要窮。若言天地之所以高深、鬼神之所以幽顯。若只言天只是高、地只是深、只是已辭、更有甚。」

(2) 「此處是緊切」「緊切」は、要緊切実。重要切実である。『語類』卷一六、四二条、董誥録「此四句、是此段緊切處」

(3) 「天如何而能高、地如何而能厚」注(1)参照。天地の高厚や鬼神の幽顯に関しては本卷一七条で既に話題になっている。同条及びその注を参照。なお天地の高厚については以下を参照。『詩経』

小雅「正月」「謂天蓋高、不敢不局。謂地蓋厚、不敢不踣。」毛伝「局、曲也。踣、累足也。」鄭箋「局、踣者、天高而有雷霆、地厚而有陷淪也。此民疾苦王政、上下皆可畏怖之言也。」孔疏「謂此上天蓋實高矣、而有雷霆擊人、不敢不曲其脊以敬之、以喻已恐觸王之忌諱也。謂此下地蓋實厚矣、而有陷淪殺人、不敢不累其足以畏之、以喻已恐陷在位之羅網也。」

(4) 「鬼神如何而為幽顯」「幽顯」の「幽」は、暗くかすかである、「顯」は、明らかである、はつきりとしている。鬼神を陰陽に配当すれば鬼は陰、神は陽、従つて鬼は幽、神は顯と結びつく。「中庸章句」一六章「子曰。鬼神之為德、其盛矣乎。」朱注「張子曰。鬼神者、二氣之良能也。愚謂、以二氣言、則鬼者陰之靈也、神者陽之靈也。以一氣言、則至而伸者為神、反而歸者為鬼。其實一物而已。」本卷一七条、楊道夫録「鬼神之幽顯、自今觀之、他是以鬼為幽、以神為顯。鬼者、陰也。神者、陽也。」『朱文公文集』卷五二「答汪長孺別紙」「汪長孺問語」天地之所以高深、鬼神之所以幽顯。天、陽也、氣也、所以高也。地、陰也、質也、所以深也。鬼神、變化不測、可謂幽矣。然造化流行、昭著上下、豈非顯耶。(朱熹答語) 鬼神、神顯。」(5) 「山岳如何而能融結」「融結」は、融けて集まる。『文選』卷一一、孫綽「遊天台山賦」「融而為川瀆、結而為山阜。」李善注「融、猶銷也。班固終南山賦曰、流澤遂而成水、停積結而為山。」六臣注「翰(李周翰)曰。…融者為水、結者為山、瀆亦水也、阜亦山也。」『語類』卷九八、二条、楊道夫録(Ⅶ 2506)「問。虛實以陰陽言否。曰。以有無言。及至浮而上、降而下、則已成形者。若所謂山川之融結、

糟粕煨燼、即是氣之查滓。要之皆是示人以理。」

(6) 「這方は格物」「方は」は前文の「學者須當知」云々と呼応している。「須當…方は…」は、是非とも…すべきであつて、それでこそ…だ。

32条

問。觀物察己、還因見物、反求諸己。此說亦是。程子非之、何也。

曰。這理是天下公共之理。人人都一般、初無物我之分。不可道我是

一般道理、人又是一般道理、將來相比、

如赤子入井、皆有怵惕。知得人有此心、便知自家亦有此心、更不消

比並自知。 寓

〔校勘〕

○「問觀物察己」朝鮮古写本は「問」の下に「或問」の二文字有り。

○「知得人有此心、便知自家亦有此心」朝鮮古写本は二つの「此心」をともに「這個」に作る。

〔訳〕

質問「物を観て己れを察するとは、物を見て(その物の道理から推し測り)、己れを反りみて(己れの道理を)求める、ということである。」云々(『河南程氏遺書』卷一八)。これはこれで正しい説です。それなのに程子がそれを批判したのは、なぜなのでしょうか。」

先生「この理は天下公共の理である。どの人もどの人も、全て同じであって、そこには自他の区別など全く存在しない。私には私の一種の道理が、人には人の一種の道理が有るから、持ち寄って引き比べてみよ、などと言うことはできない。」

例えば。赤ん坊が井戸に落ちそうになるのを見れば、誰しもが怵惕おどろきの気持ちを抱く、という場合のように、人にこの心の有ることがわかれば、自分にもやはりこの心のあることがわかる。互いを引き比べてみる必要は全くなく、自ずとわかることなのだ。」徐寓録

〔注〕

(1) 「觀物察己、還因見物、反求諸己」「還」は、やはり、また。所引は『河南程氏遺書』卷一八「問。觀物察己、還因見物、反求諸身否。曰。不必如此說。物我一理。纔明彼即曉此合内外之道也。語其大。至天地之高厚、語其小、至一物之所以然、學者皆當理會。」同上「觀物理以察己、既能燭理、則無往而不識。」「大学或問」「或問。觀物察己者、豈因見物而反求諸己乎。曰。不必然也。物我一理。纔明彼即曉此、此合内外之道也。語其大、天地之所以高厚、語其小、至一物之所以然、皆學者所宜致思也。」なお「反求諸己」については以下を参照。『論語』「衛靈公」「子曰。君子求諸己、小人求諸人。」「礼記」「射義」「射者、仁之道也。射求正諸己、己正然後發、發而不中、則不怨勝己者、反求諸己而已矣。」「孟子」「公孫丑」上「射者正己而後發、發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣。」「孟子」「離婁」上「禮人不答、反其敬。行有不得者、皆反求諸己。」

(2) 「這理是天下公共之理」『語類』卷九四、三一条、廖德明録(VI) 333「問。太極動而生陽、靜而生陰、見得理先而氣後。曰。雖是如此、然亦不須如此理會。二者、有則皆有。問。未有一物之時、如何。曰。是有天下公共之理、未有一物所具之理。」

(3) 「人人都一般」ここでの「一般」は、同じ、同様。

(4) 「初無物我之分」「初」は、否定詞の前について否定を強める。はなから、全く。「物我」は自己と他者、自他。「物我之分」については以下を参照。『孟子或問』「或問。大舜之善與人同、何也。曰。善者天下之公理、本無在己在人之別。但人有身、不能無私於己、故有物我之分焉。」「善與人同」云々は、『孟子』「公孫丑」上。

(5) 「不可道我是一般道理、人又是一般道理」「道」は、言う。ここでの「一般」は、一件、一種の意。

(6) 「將來相比」「將來」は、持ち来る、持ち寄る。「相比」は、比較する、引き比べる。

(7) 「如赤子入井、皆有怵惕」『孟子』「公孫丑」上「所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。」

(8) 「更不消比並自知」「不消」は、…する必要がない、…するまでもない。「更」は、否定の強調。「更不消」は、全く…する必要はない。「比並」は、比較する、引き比べる。「將來相比」の「相比」と同義。なお注(1)所引の程子語と本条における朱熹語の関係を整理すれば、「將來相比」「比並」は「因見物反求諸己」と対応し、「知得人有此心、便知自家亦有此心」は「纔明彼即曉此」と対応する。

格物致知、彼我相對而言耳。格物所以致知。於這一物上窮得一分之理、即我之知亦知得一分。於物之理窮二分、即我之知亦知得二分。於物之理窮得愈多、則我之知愈廣。其實只是一理。才明彼即曉此。

所以大學說致知在格物、又不說欲致其知者在格其物。蓋致知便在格物中、非格之外別有致處也。

又曰。格物之理、所以致我之知。 備

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

格物と致知とは、両者を対にして述べたものに過ぎない。(その実)物に格することは知を致す所以に他ならないのだ。この一物に即して一分の理を窮めれば、私の知もまたその一分を知ることになる。物の理を二分窮めれば、私の知もまたその二分を知ることになる。物の理を窮めることが多ければ、私の知もそれだけ益々広くなる。その実、(格物と致知によって獲得するものは)同じ一理に他ならない。(程子が言うように)「彼(物之理)をわずかも明らかにすれば、直ちに此(我之知)が暁らかになる。」

それ故に『大学』も、「致知は格物に在り」と説いて、「その知を致さんと欲する者は、その物に格るに在り」とは説かないのだ。思うに

致知はとりもなおさず格物中に存するのであって、格ることの他に別に致すところが有るわけではないのだ。」

更におっしゃった。「物の理に格ることは、我の知を致す所以に他ならない。」 沈憫録

〔注〕

(1)「格物所以致知」『語類』卷一五、一四〇条。李閔祖録「致知在格物、知與物至切近、正相照在。格物所以致知、物才格、則知已至、故云在。」

(2)「於這一物上窮得一分之理、即我之知亦知得一分」「窮得」「知得」の「得」はこの場合、他動詞の後ろに添えて目的語を導く用法。

なおこの文の趣旨や表現に関連する用例を挙げておく。『語類』卷

九、六二条、葉賀孫録(1155)「今只是要理會道理。若理會得一分、便有一分受用。理會得二分、便有二分受用。理會得一寸便是一寸、一尺便是一尺、漸漸理會去便多。」『朱文公文集』卷五一「答黃子耕」

第五書「格物、只是就一物上窮盡一物之理。致知、便只是窮得物理盡後、我之知識亦無不盡處。」

(3)「才明彼即曉此」『河南程氏遺書』卷一八、及び『大学或問』「物我一理。纔明彼即曉此、合内外之道也。」ともに前条注(1)に既引。

(4)「所以大學說致知在格物、又不說欲致其知者在格其物」『大学章句』経「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。

欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」八条目のうち、平天

下乃至致知までは「欲…者、先…」という形で文章構成されながら、

最後の致知と格物の関係のみが「致知在格物」と表現される理由を話題にするもの。『語類』卷一五、一四〇条。李閔祖録「自欲明明徳於天下至先致其知、皆是隔一節、所以言欲如此者、必先如此。致知在格物、知與物至切近、正相照在。格物所以致知、物才格、則知已至、故云在、更無次第也。」同、一四一条、黄幹録「大學明明徳於天下以上、皆有等級。到致知格物處、便較親切了、故文勢不同、不曰致知者先格其物、只曰致知在格物也。」同、一四二条、潘履孫録「欲明明徳於天下者、先治其國、至致知在格物。欲與先字、謂如欲如此、必先如此、是言工夫節次。若致知在格物、則致知便在格物上。看來欲與先字、差慢得些子、在字又緊得些子。」

(5) 「格物之理、所以致我之知」『大学章句』伝五章「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。」

『朱子語類』卷一八(1~33条)、訳注担当者

1 ~ 8 条	福 谷 彬
9 ~ 13 条	岩本真利絵
14 ~ 18 条	陳 佑 真
19 ~ 25 条	宇佐美文理
26 ~ 33 条	中 純 夫

(二〇一八年九月二十六日受理)

(ふくたに あきら 京都大学人文科学研究所附属東アジア

ア人文学部研究センター助教)

(いわもと まりえ 大谷大学任期制助教)

(ちん ゆうま 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(うさみ ぶんり 京都大学大学院文学研究科教授)

(なか すみお 京都府立大学文学部教授)